

平成30年度

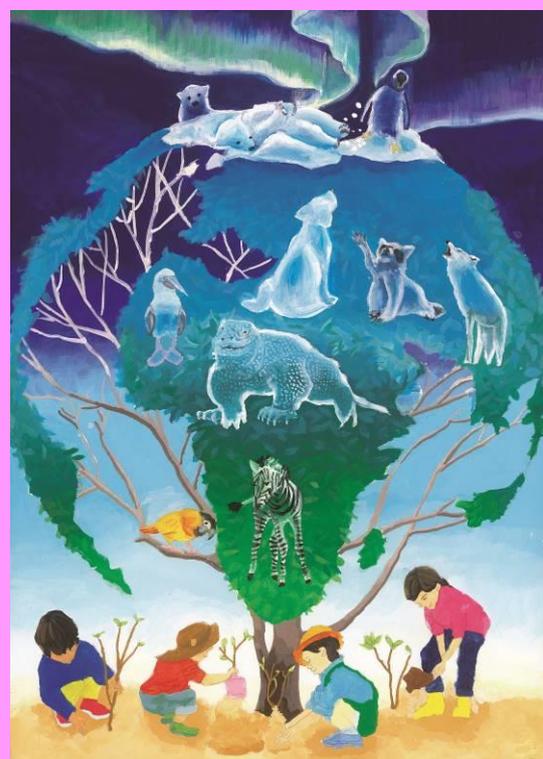
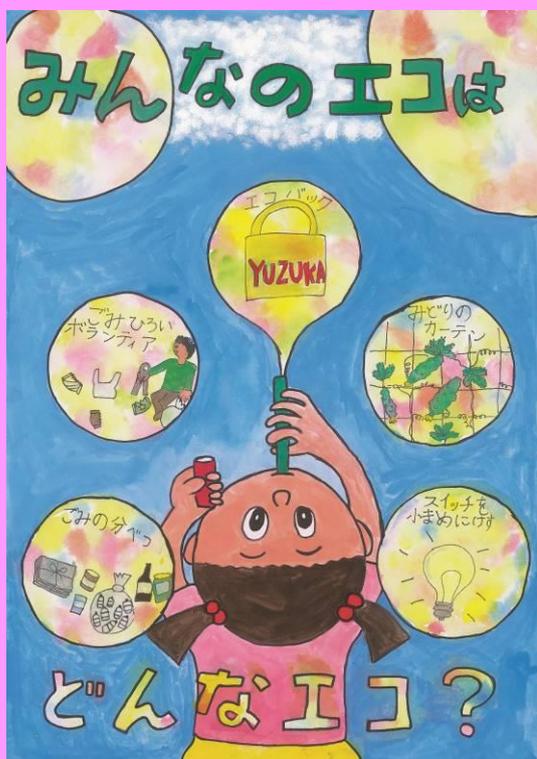
第50回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)

第54回 東京都小中学校環境教育研究発表会

## 21世紀「環境の世紀」への提言

# 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

—環境教育によって育む学力と環境保全意欲—



日時	平成30年11月30日(金)	10時00分	～	16時30分
会場	東京都府中市立武蔵台小学校			
主催	全国小中学校環境教育研究会	東京都小中学校環境教育研究会		
後援	文部科学省	環境省	東京都教育委員会	
	府中市教育委員会	全国連合小学校長会	全日本中学校長会	
	東京都公立小学校長会	東京都中学校長会	府中市立小学校長会	
	府中市立中学校長会	日本教育公務員弘済会東京支部		
	日本環境教育学会	ESD 活動支援センター	関東 ESD 活動支援センター	
	ESD 推進フォーラム			

表紙・裏表紙の絵画ポスター

第22回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール受賞作品

#### 表表紙の絵画

##### ◆会長賞（左）

小学校の部 東京都八王子市立東浅川小学校 3年 田中 柚香

##### ■文部科学大臣賞（右）

中学校の部 学習院女子中等科 1年 棚橋 志帆

#### 裏表紙の絵画

##### ■文部科学大臣賞（左）

小学校の部 岐阜県多治見市立滝呂小学校 6年 久野 莉菜

##### ◆会長賞（右）

中学校の部 千葉県茂原市立茂原中学校 2年 神永 真悠子

主 催：全国小中学校環境教育研究会

後 援：文部科学省 / 環境省 / 公益財団法人日本環境協会

協 賛：株式会社みずほフィナンシャルグループ

明治安田生命保険相互会社

丸紅株式会社

応募総数：小学校 1,638作品 中学校 1,992作品 計 3,630作品

# 目 次

目次	･･････	1
大会次第	･･････	2
挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長	野澤 由美	･･････ 4
挨拶 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官	清原 洋一 様	･･････ 5
挨拶 環境省大臣官房 環境経済課 環境教育推進室長	河野 通治 様	･･････ 6

## 口頭発表の部

### <基調発表>

- 1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進  
～環境教育によって育む学力と環境保全意欲・2010年の食品ロス～  
東京都小中学校環境教育研究会  
会 長 東京都品川区立第三日野小学校 校長 藤森 克彦  
研究部長 東京都多摩市立南鶴牧小学校 校長 関口 寿也 ･･････ 8

### <口頭発表>

- 2 川に棲む生き物と共存できる社会を目指して、今自分たちがやりたいこと  
「かがやけ！ブルーリバー♡ハッピープロジェクト」～大岡川でつながり合おう大作戦～  
神奈川県横浜市立日枝小学校 校長 住田 昌治  
教 諭 渡邊 知和 ･･････14
- 3 SDGsの達成に向けた学校教育の取組  
東京都大田区立大森第六中学校 校長 松尾 廣文  
指導教諭 柴崎 裕子 ･･････20

## 誌上発表の部

- 1 持続可能な社会づくりについて、自分の考えをもち、行動する児童の育成  
～守ろう環境！白銀川・隈川 探検隊～  
福岡県大牟田市立吉野小学校 校長 坂本 智典 ･･････26
  - 2 環境省ESD環境教育モデルプログラムの実証とSDGsを踏まえた環境教育  
秋田県大仙市立清水小学校 校長 照井 美久 ･･････32
  - 3 これからの総合的な学習の時間のあり方を求めて  
～地域とつながる探究的な学習づくりの実践～  
静岡県静岡市立北沼上小学校 校長 見城 秀明 ･･････38
  - 4 小笠原村を背負っていく人材育成の実践～私たちの世界自然遺産小笠原諸島父島～  
東京都小笠原村立小笠原小学校 校長 西澤 盛和  
主幹教諭 清水 智 ･･････44
  - 5 未来につながる、世界に広がる志をもった生徒の育成  
静岡県磐田市立豊田中学校 校長 倉島 茂見 ･･････50
- 指導講評 東京都教育庁 指導部 主任指導主事 赤津 一也 様 ･･････56
- 講演 「続々見つかる『第二の地球』候補 ー宇宙生命発見への期待ー」  
自然科学研究機構国立天文台 副台長 渡部 潤一 氏 ･･････57
- 全国小中学校環境教育研究会 沿革史 ･･････58
- 大会宣言 ･･････71

# 大会次第

日 時 平成30年11月30日(金) 10時00分 ~ 16時30分

会 場 東京都府中市立武蔵台小学校 (校長 野澤 由美)

## 会 次 第

- |   |      |                               |           |         |
|---|------|-------------------------------|-----------|---------|
|   |      | 司会・進行                         | 会計副部長     | 山口 京子   |
| 1 | 開会の辞 |                               | 副 会 長     | 棚橋 乾    |
| 2 | 開会挨拶 | 全国小中学校環境教育研究会                 | 会 長       | 野澤 由美   |
| 3 | 来賓祝辞 |                               |           |         |
|   |      | 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官           |           | 清原 洋一 様 |
|   |      | 環境省大臣官房 環境経済課 環境教育推進室長        |           | 河野 通治 様 |
|   |      | 東京都教育庁 指導部 義務教育指導課長           |           | 栗原 宏成 様 |
|   |      | 府中市教育委員会 教育長                  |           | 浅沼 昭夫 様 |
| 4 | 来賓紹介 |                               | 会 長       | 野澤 由美   |
| 5 | 研究発表 | 基調発表・口頭発表                     | 司会 会計部長   | 伊勢 明子   |
| 6 | 指導講評 | 東京都教育庁 指導部 主任指導主事             |           | 赤津 一也 様 |
| 7 | 講 演  | 「続々見つかる『第二の地球』候補 一宇宙生命発見への期待」 |           |         |
|   |      | 自然科学研究機構国立天文台 副台長             |           | 渡部 潤一 氏 |
| 8 | 大会宣言 |                               | 事務局次長     | 阿閉 暢子   |
| 9 | 閉会の辞 |                               | 副会長・東京都会長 | 藤森 克彦   |

## ■ 口頭発表の部 ■

### < 基調発表 >

1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

～環境教育によって育む学力と環境保全意欲・2010年の食品ロス～

東京都小中学校環境教育研究会

会 長 品川区立第三日野小学校 校 長 藤森 克彦

研究部長 多摩市立南鶴牧小学校 校 長 関口 寿也

### < 口頭発表 >

2 川に棲む生き物と共存できる社会を目指して、今自分たちがやりたいこと

「かがやけ！ブルーリバー♡ ハッピープロジェクト」～大岡川でつながり合おう大作

戦～神奈川県横浜市立日枝小学校 校 長 住田 昌治

教 諭 渡邊 知和

3 SDGsの達成に向けた学校教育の取組

東京都大田区立大森第六中学校

校 長 松尾 廣文

指導教諭 柴崎 裕子

## □ 誌上発表の部 □

1 持続可能な社会づくりについて、自分の考えをもち、行動する児童の育成

～守ろう環境！白銀川・隈川 探検隊～

福岡県大牟田市立吉野小学校

校 長 坂本 智典

2 環境省ESD環境教育モデルプログラムの実証とSDGsを踏まえた環境教育

秋田県大仙市立清水小学校

校 長 照井 美久

3 これからの総合的な学習の時間のあり方を求めて

～地域とつながる探究的な学習づくりの実践～

静岡県静岡市立北沼上小学校

校 長 見城 秀明

4 小笠原村を背負っていく人材育成の実践～私たちの世界自然遺産小笠原諸島父島～

東京都小笠原村立小笠原小学校

校 長 西澤 盛和

主幹教諭 清水 智

5 未来につながる、世界に広がる志をもった生徒の育成

静岡県磐田市立豊田中学校

校 長 倉島 茂見

## 地球の未来を担う子供たちの学びとは

全国小中学校環境教育研究会  
会長 野澤 由美

この度、記念すべき第50回全国小中学校環境教育研究大会（東京大会）が東京都府中市において盛大に開催できますこと、心より御礼申し上げます。本会は昭和42年に公害教育研究会として誕生し、その後全国小中学校環境教育研究会と改名して、今年度めでたく50周年の節目を迎えました。発足当時は地域の公害から子供たちの健康を守ることが急務であったことから、教育環境や公害に対する意識・健康の状況調査をはじめ、環境週間の行事や環境教育推進事業への協力を通じて、様々な啓発活動を進めてきました。それから半世紀、地球規模での気候変動や温暖化による影響など様々な環境問題が深刻化している現代では、地球の未来を担う子供たちに「環境を保全する意欲や態度と環境問題を解決するための問題解決能力」を育成することが喫緊の課題となってきました。今後、子供たちが誰も予測できない社会を生き抜くためには、世界の環境・貧困・人権・平和・開発といった様々な問題を自らの課題として捉え、主体的に学び、身近なところから協力して取り組むことを通して、課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことが重要となります。その継続によって社会全体のパラダイムシフトを図り、持続可能な社会を創り出していくことがESDの目標であり、私たちが取り組んできた環境教育のめざすところでもあります。

今、世界では、国連で掲げられた「2030年迄に達成されるべき17のゴールSDGs」の実現へ向けてESDの柱となる環境・社会・経済への取り組みが各国の施策として実施されつつあります。SDGsは、我々がすぐにでも取り組まなければならない多様な17の内容を明確に示しているため誰にでも分かりやすく、多くの企業やNPO、行政の具体的な取り組みが加速してきました。日本では、今回改訂された小・中学校学習指導要領の前文に「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手となることができるようにする」ことが明記され、ESDを踏まえた環境教育の展開が示されました。小中学校においてSDGsを視野に入れた教育活動の充実を図ることが、これまで以上に重要になってくるでしょう。各学校・地域の実態を踏まえ、環境教育ESDで育む能力・態度を明確にし、主体的・対話的で深い学びによって育つ学力・活動意欲の向上を図るためのカリキュラム・マネジメントを推進する必要があります。

本会ではこれからも、地球の未来を担う子供たちの主体的な学びを成立させることを大切にしながら、教育に携わる多くの方々とともに、環境教育を中心に据えたESDの研究を進めていきたいと考えています。本大会が各地域の実践交流の場となり、一層輪を広げ連携していくためのきっかけとなることを願っております。

本大会を開催するにあたり、文部科学省、環境省、東京都教育委員会、府中市教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、府中市立小学校校長会、府中市立中学校長会、日本教育公務員弘済会東京支部、日本環境教育学会、ESD活動支援センター、巻頭ESD活動支援センター、ESDフォーラムの皆様には、多大なるご指導、ご助言、ご後援を賜り、心より感謝申し上げます。また、授業公開及び会場を提供していただきました、府中市立武蔵台小学校の皆さま、関係の方々に厚く御礼申し上げます。

## 環境教育の発展・充実を

文部科学省初等中等教育局  
主任視学官 清原 洋一

現代社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっています。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されています。このような時代において、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められています。

こうした状況を踏まえ、平成 28 年 12 月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が出され、この答申に基づき、平成 29 年 3 月に小学校、中学校の学習指導要領が公示されました。今回は、新たに前文が設けられ、これからの学校には、教育基本法に示す目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められていることが明記されています。また、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要であることなども示されています。そのため、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理し、これからの資質・能力を着実に身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが示されています。さらに、教育課程に基づき組織的かつ計画的に計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくというカリキュラム・マネジメントについても新たに記載されています。

今回の学習指導要領改訂は、これまでの環境教育の取組に見られるように、子供の姿や地域の実状を適切に捉え、育成すべき資質・能力を明確にし、学校としてのまとまりの中で、地域とともに子供の学びを改善・充実していこうというものです。環境教育を更に発展・充実していくことは、新学習指導要領の示す方向性とも合致するものです。

最後になりましたが、本大会の研究主題についての活発な議論等が行われ多大の成果が得られることを期待申し上げるとともに、本大会並びに関係の皆様の一層のご健勝と益々のご発展を心より祈念申し上げます。

## 第五次環境基本計画とESD

環境省大臣官房

環境教育推進室長 河野 通治

本年4月17日、「第五次環境基本計画」が閣議決定されました。環境基本計画とは、環境基本法第15条に基づき、政府の環境の保全に関する総合的かつ長期的な施策の大綱などを定めたものであり、前回の第四次環境基本計画は平成24年4月に策定されています。

本計画は、平成27年の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」や「パリ協定」の採択後に初めて策定される環境基本計画であり、持続可能な開発目標（SDGs）の考え方も活用しながら、複数の課題を統合的に解決していくことが重要とされています。そのため、本計画では、以下のとおり、特定の施策が複数の異なる課題を統合的に解決するような分野横断的な6つの重点戦略が設定されています。

1. 持続可能な生産と消費を実現するグリーンな経済システムの構築
2. 国土のストックとしての価値の向上
3. 地域資源を活用した持続可能な地域づくり
4. 健康で心豊かな暮らしの実現
5. 持続可能性を支える技術の開発・普及
6. 国際貢献による我が国のリーダーシップの発揮と戦略的パートナーシップの構築

また、本計画では、環境政策の展開にあたり、多様な主体のパートナーシップの充実・強化の重要性が唱われているほか、地域資源を活用し、自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて補完し支え合う「地域循環共生圏」の創造による持続可能な社会の実現を目指すこととされています。

ESDについては、重点戦略3において、「人づくりによる地域づくり」として、ESDの考え方をベースに、多様なステークホルダーとの連携を図りながら持続可能な地域づくりを担う「人づくり」を行い、パートナーシップの深化、他地域との交流等を進める人材の育成を行うこととされています。

環境教育・環境学習などの環境保全の取組は、「花」である重点戦略を支える「幹」や「根」に当たる基盤として、文字通り、環境政策の根幹をなす重要な取組と言えます。引き続き、関係省庁や学校関係者をはじめとする多くの関係者の皆様と連携・協働しながら、環境教育やESDに係る取組を揺るぎなく着実に推進していくことにより、持続可能な社会の構築に向けた担い手づくりを進め、「環境・経済・社会の統合的向上」の具体化に寄与していきたいと考えています。

環境省では、文部科学省の協力の下、教職員等の皆様に向けた研修プログラムとして、持続可能な社会の担い手育成のための質の高い環境教育を教育現場で実践し、家庭や地域に浸透させていくリーダー人材の育成研修も実施していますので、是非ともご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、第50回全国小中学校環境教育大会のご盛会と関係者の皆様の一層のご活躍を心からお祈り申し上げます。

■ 口頭発表（基調発表） ■ P 8 ~ 2 5



□ 誌上発表 □ P 2 6 ~ 5 5



## 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

～環境教育によって育む学力と環境保全意欲・2100年の食品ロス～

東京都小中学校環境教育研究会  
会 長 藤森 克彦  
研究部長 関口 寿也

### I 研究主題設定の理由

2018年の夏は日本も含め世界的に記録的な猛暑となり、平均気温が軒並み最高値を塗り替えたことは記憶に新しい。温暖化がいよいよ現実的な事象として如実に表出し始めた年という話が飛び出してくるほどであった。ターニングポイントにならないことを祈るばかりである。気候変動の影響により世界各地で発生している異常気象や、エネルギー問題、貧困や飢餓など、人類がかつて経験したことのない環境問題が地球規模的に生じている。国連は、2015年「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で、人間、地球及び繁栄のための行動計画として、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs）」をかかげた。その13番目には、「気候変動に具体的な対策を」と記され、2016年11月には「パリ協定」が発効された。足元に火のついた地球温暖化をはじめとする環境問題は、各国政府やNGO、企業で、様々な広がりを見せている。

例えば、大手銀行や金融機関が相次いで炭素集約型事業への投融資を減らし、低炭素型投資へシフトする“Divestment（ダイベストメント）”の動きが進んでいる。ESG投資（Environment Social Governance）と言われ、ESGの観点で薄いや大きなリスクを抱えた企業であり、長期的な成長が望めない企業であるとさえ言われている。環境問題への意識や対策が、世界経済を巻き込む潮流となり始めた。40基もの石炭火力発電所の建設計画がある日本は、この潮流に乗り遅れてはいまいか。併せて、7番目にある「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」では、自然エネルギーの推進も記された。自然エネルギー（再生可能エネルギー）の推進は、地球環境問題を語る上では大きな鍵となる。太陽光や風力等の発電は、日本ではまだ微力と思いがちであるが、既に九州電力管内では全ての電力を自然エネルギーで賄える規模となっている。また、これまでベースロード電源としての原子力発電は、出力調整が自在にできないことで夜間電力を発生させていた。余剰となる夜間電力により揚水式水力発電所の上部調整池に水を送っていたが、現在は原子力発電の停止と太陽光発電の加速により余剰電力が昼間に発生し、日中に上部調整池へのポンプ稼働している。暑かった今夏に、節電の呼びかけが行われなかったのは、この理由による。SDGsや地球環境問題を機として、世界で急速なパラダイムシフトが始まっている。



学校に屋根貸して設置されたソーラーパネル

東京都小中学校環境教育研究会では、気候変動（温暖化）は、国連や科学者、政府、NGO、企業だけが検討していくべき課題ではなく、広く市民の意識も高め、行動に変容させていくために学校教育の中にこそ必要であると考えている。2016年度から環境省が実施する「地球温暖化防止コミュニケーション」事業において、本研究会員が地球温暖化防止コミュニケーションの資格を得てきた。IPCC AR5の気候変動に関する知見を教室において正しく伝え、理解させ、将来にわたる希望の種を植えるための授業プラン「2100年の天気予報」を作成し、研究員による小学校高学年モデル・中学年モデルとして2年間にわたり授業を実践してきた。これは、気候変動を危機感として共有し、環境問題について主体的に関わるきっかけとなるよう意図したものであった。

新学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の作り手となることができるようにする」と記され

ている。新しい教育課程には、この先の世界をどうしたいのか、そのために、どのような人間を育てたいのか、送り出すのか、というビジョンが欠かせない。その実現のための中心となる学習活動は「総合的な学習の時間」である。2015年に開始されたGAP（グローバルアクションプログラム）やホールスクールアプローチに基づき、各教科、領域との横断的関連をもって学びを進めるためのESDカレンダーなど、未来を見据えた際に「総合的な学習の時間」の果たすべき役割はますます大きくなっている。そこでは単なる知識ではなく、よりよい未来を創造する人間の育成に向けた資質・能力の向上が求められている。ESDや問題解決学習といった学習活動が、数値で表すことができるような具体的な物事を指し示すのではないことが、教員に難解さや不安を招いていることは間違いない。今後は、指導する教員自身のパラダイムシフトも不可欠なのである。

本研究会では、これまで持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成のために、必要な学力や環境保全意欲とは何か、その能力・態度を育成するための学習方法について検討し、重要となる点を明らかにしてきた。また、持続可能な社会づくりのための環境教育を推進するために、その理念や指導法などについて普及啓発の取組を進めてきた。昨年度まで取り組んだ授業プラン「2100年の天気予報」は、総合的な学習の時間の環境に関する単元内容を始めるきっかけとして取り組むものであった。今年度は、先に述べたESDや問題解決学習に対して教員が抱く難解さや不安に一つの光明となるべく、具体的にどのような年間指導計画が実行できるのかを普遍的に探り、立案・実践してみることとした。これまで本研究会が取り組んできたESDの授業概念を盛り込み、これからの世界を生きるための児童・生徒の育成を図るべく、どこの地域でも実現ができる実践的な年間指導計画例を作成した。環境教育とは何か、ESDとは何か、道筋の見えない学校現場に参考となれば幸いである。

## II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成を行う。
- 2 教員のアンケート調査をもとに、「総合的な学習の時間」への意識について推し量る。
- 3 全国小中学校環境教育研究会で作成した「新しい環境教育」で示す児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、本会研究部で年間指導計画・授業プランを創造する。

### 【児童・生徒に身に付けさせたい3つの能力・態度】

地球とそこに生きるすべての生命にとって

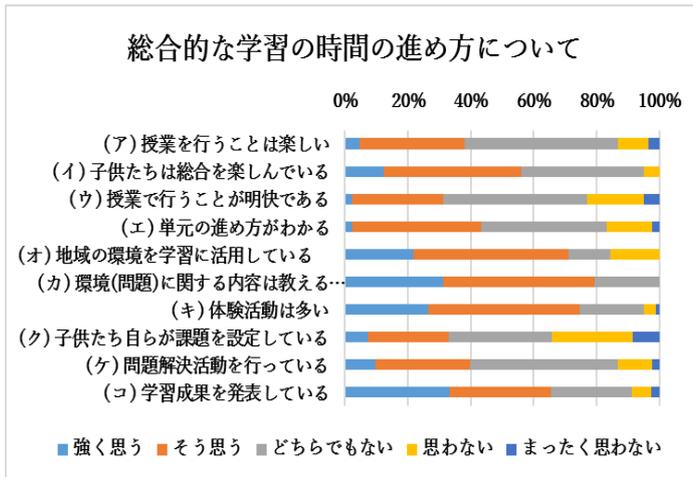
- (1) よりよい環境を求め持続させる意欲や態度
- (2) よりよい環境のあり方を考える力
- (3) よりよい環境の創造を目指す社会にすすんで参画し、貢献する実践力

- 4 全国小中学校環境教育研究会、外部機関と連携をし、研究員各校において指導実践を深める。
- 5 全国小中学校環境教育研究会の発表会（平成30年11月30日 東京都府中市立武蔵台小学校にて開催予定）において、研究発表を行う。

## III 研究経過

- 1 学校現場でのESD推進の必要性を再確認
- 2 各教科・領域で実践可能な「ちょこっとESD」の検討
- 3 ESD（環境単元）の実施づらさや、教員のESDの必要性に関する意識調査
- 4 これまで実施してきた「2100年の天気予報」を単元のきっかけとした、「食品ロス」を課題とした年間指導計画例の作成
- 5 研究会員の学校における授業実践（一部）
- 6 ポートフォリオ、イメージマップによる授業検証

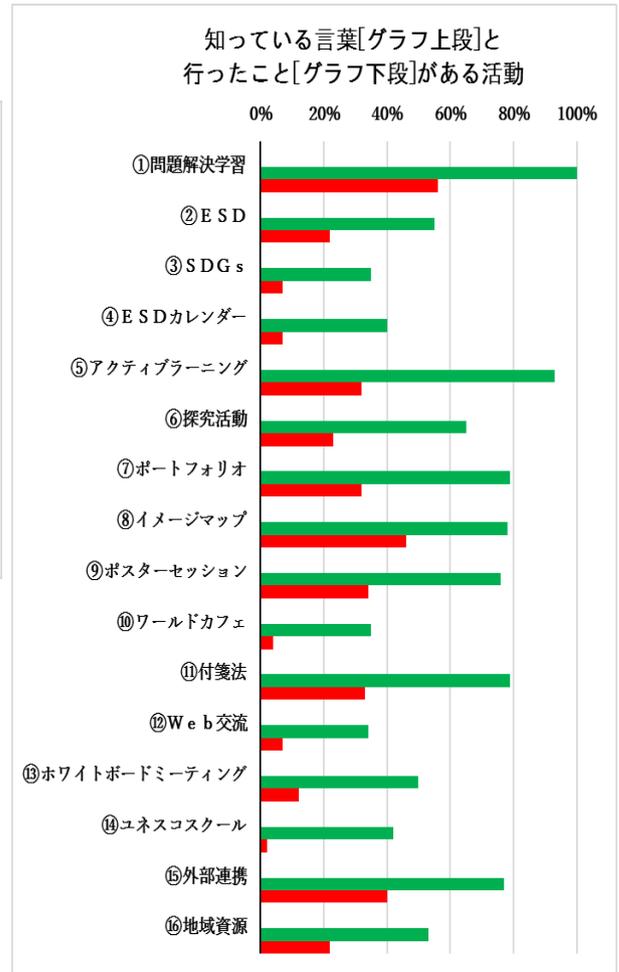
#### IV 教員アンケートから



年間指導計画例作成に際して、都内の小中学校教員に「総合的な学習の時間」についてのアンケートを実施した。

年間の単元数は5つ以上ある学校が多く、授業内容や進め方に不安をもっている教員も多くみられた。ESDの認知度は55%であるがSDGsは35%にとどまる。ESD的学びの手法についても、既知ではあるが実践は少ない傾向が見られた。

これらのことから、学ぶ内容や方法を明確にした年間指導計画例を作成することは、ESDの学びをベースとした環境教育を進める上で、意義のあることであると考えた。



#### V 第5学年 「総合的な学習の時間」年間指導計画例

##### 1 年間指導計画テーマ 「2100年の食品ロス」

##### 2 年間指導計画の目標

～食品ロスについて学び、人・自然・社会と自分とのつながり・関わりを理解し、多面的・総合的に考え、実践できる力を養う～

##### 3 「食品ロス」を年間指導計画例で扱った理由

- (1) 2050年代に世界人口が100億人になる予測の中で、食糧問題は重要な課題である。
- (2) 気候変動は食料生産量を左右する重要な要素の一つである。
- (3) 食糧問題(食品ロス)を通して、主体的・対話的な学習活動を展開し、具体策を思考・実践することができ、未来の創り手となるための資質・能力の育成ができる。
- (4) どの地域でも実践可能な題材であり、児童・生徒にも発信や実践が可能であるとともに、未来への決意にもつながる学習である。
- (5) 題材の裾野の大きさが、年間を通して学習する題材として適している。
- (6) 1つのテーマで学習することで、ESDの学習方法例を指導者側が体得しやすい。

##### 4 他教科とのつながり

本年間指導計画例は、「食品ロス」を題材として学習活動を進めていくが、同時に下記例図が示すように様々な教科・領域との関連をなす。ホールスクールアプローチを意識して学習活動を進めることで、より効果的に学ぶことができる

【本年間指導計画例と教科とのつながり（理科：大日本図書 社会：東京書籍 家庭：東京書籍）学習単元順】

第 5 学 年	
【教科名】単元名	本年間指導計画例との内容の繋がり
《1学期》 【社会】 世界の中の国土 【社会】 日本の国土の地形の特色 【理科】 植物の発芽、植物の成長 【理科】 メダカのたんじょう 【社会】 低い土地・高い土地の暮らし 【社会】 あたたかい土地・寒い土地の暮らし	陸地に占める食料生産耕地の割合 食料生産に適した日本の耕地の割合 発芽の条件、発芽と養分、成長の条件 メダカの飼育、メダカの卵、メダカの成長 土地の高低に即した農業の工夫 気候条件に即した農業の工夫
《2学期》 【家庭】 おいしい楽しい調理の力 【社会】 暮らしを支える食料生産 【理科】 植物の実や種子のでき方 【社会】 水産業のさかんな地域 【家庭】 食べて元気、ご飯とみそ汁 【社会】 これからの食料生産とわたしたち	ゆでる調理、工夫しておいしい料理にする 食料生産の工夫と課題 花のつくり、受粉 漁の工夫、養殖の工夫、食品加工の工夫 主食の役割と栄養素、毎日の食生活 食料生産の問題点、食生活の変化、食の安全・安心、 これからの食料生産
《3学期》 【社会】 環境を守るわたしたち 【家庭】 朝食から健康な1日の生活を	環境保全と食料の関連、地球温暖化 朝食の栄養バランスの良いとり方、朝食づくりの工夫

## 5 ESDモデルプラン「2100年の食品ロス」

単元過程	時数	活 動 内 容	指 導 留 意 事 項
つかむ	2	<b>【1学期】「食品ロスってなに？」</b> (1) 温暖化による2100年の天気予報について学ぶ	・2016年度東京都小中学校環境教育研究会研究員実践参照
つかむ	1	(2) 温暖化に対して私たちができること、「暮らしの中からもったいない」を探そう ・洗面所やお風呂の水・エアコンの冷やしすぎ・給食の食べ残し・落とし物・電気・・・	
調べる①	1	(3) 身近である食べ物のもったいないを知ろう ・身の回りのもったいないを書き出し、分類する	・生産・加工・流通・消費の視点で分類する
つかむ	1	(4) もったいないおにごっこ ・食べ物になりきって、食品ロスについて考える	(例)ハンガーフリーワールド参加型学習教材 (参考指導案後述)
つかむ	8	(5) 食品ロスの自分の課題を見つけよう～4つの分野の食品ロスを知る ①生産（農家・漁業・林業・畜産業）に従事する方の話を聞き、食品ロスについて学ぶ ②加工（工場・集荷場・農協・漁協・林業組合）に従事する方の話を聞き、食品ロスについて学ぶ ③流通（スーパー・小売り・コンビニ・通信販売）に従事する方の話を聞き、食品ロスについて学ぶ ④消費（飲食店・家庭・学校）に従事する方の話を聞き、食品ロスについて学ぶ	・4つの分野に従事する方を招き、それぞれの過程における食品ロスについて学ぶ ・保護者参加を募る
調べる② まとめる①	6	(6) 興味をもった過程についてまとめ、発表会を行う	・個人でもグループでもよい ・全体発表

つかむ	理科 の時 数	(7) 大豆の栽培 大豆を育て収穫する一連の作業を体験する (芽だし→苗植え→生育→収穫)	・理科において栽培する ・地域や保護者との共同 作業
調べる③ まとめる②	10	【2学期】「私たちを取り巻く食品ロス」 (8) 探究学習① 「生産・加工過程の食品ロスを調べよう」 ・生産・加工過程について自分のテーマを決 め、食品ロスについてさらに広く深く調べ、 まとめる ・まとめたものをポスターセッションで発表 する	・循環型農業・わけあり 商品出荷者などを招き、 食品ロス対策について実 践を聞く ・発表は参観日などと重 ねる等工夫し、保護者や GTも巻き込む ・保護者参加を募る
つかむ	6	(9) 豆腐作り体験 ・豆腐屋さんを招いて豆腐づくりを行い、食 べる ・おからを使ってエコクッキングを行う	
調べる④ まとめる③	10	(10) 探究学習② 「流通・消費過程の食品ロスを調べよう」 ・流通・消費過程について自分のテーマを決 め、食品ロスについてさらに広く深く調べ、 まとめる ・まとめたものをポスターセッションで発表 する	・フードバンク・期間間 近商品の活用等に取り組 む方を招き、食品ロスの 対策について実践を聞く (例)もったいない. info 「α米から五平餅を作る」 (例)こども食堂 ・発表は参観日などと重ねる等工夫し、 保護者やGTも巻き込む
発信する①	5	(11) 調べた事を発信する① ・We b交流①(生産地⇔消費地の視点で交 流を行う)～他の交流方法も検討	・互いの生活の場が異な る地域との交流を行うこ とで、探究学習③の視点 として活かす
調べる⑤ まとめる④	6	(12) 探究学習③ ・食品ロスを減らすために、自分が具体的に できることを考える ・ワールドカフェ方式で調べてきたことを意 見交流させ、食品ロス対策として実践でき ることを考えさせる ・実践を計画する	・未来に向けての社会シ ステム的な実践計画でも よい
行動する①	1	(13) 実践学習 ・実践の進捗状況を記録させ、確認する	・家庭で実践に取り組む
行動する② まとめる⑤ 発信する②	3 5	【3学期】「2100年に向けてできること～食品ロ スのない未来へ」 (14) まとめ ・学習してきたことを発信に向けてまとめる (15) 発信する② ・We b交流①の学校と2回目の交流を行う ・発信だけでなく討論することで、これから の食環境についての考えを深める	・自分たちが考え、実践 したことを未来へどう活 かすかの視点でまとめる
調べる⑥ まとめる⑥	1	(16) 振り返り・まとめ ・発信する②で明らかになった点をさらに探 究し、まとめる ・発表準備	
発信する③	2	(17) 発信する③・最終発表 ・ゲストティーチャー・地域・保護者・下級 生にむけて学んできたことをポスターセッ ションで発表する	・発表の場や形式は児童 の意向や発表内容を汲み 企画する

まとめる⑦	2	(18) 自分の記録をつくる ・食品ロスの探究学習を振り返ってまとめ、記録として次年度に送る ・図書室に蔵書としてまとめた冊子を置く	
-------	---	--	--

6 指導案例

第5時「もったいないおにごっこ」 本時案

展開	指導内容	支援・留意点
つかむ	<p>食べものになりきって、旅をして、食品ロスについて、みんなで考えていこう</p> <p>●<b>普段の食生活</b>を思い出す ・最近の1週間で、何か食べ物を残したり、捨てたりしたことはありますか。何を残しましたか。</p> <p>●<b>食べ物になりきり</b>、自己紹介をする ・自分がどんな食べ物になったのか、どんなふう食べてもらいたいかを共有する。</p> <p>・私は「お米」、食べ物を残さない人に食べてほしい ・私は「豆腐」、外国人に味噌汁の具として食べてほしい</p>	<p>・食品ロスという言葉を押さえる。</p> <p>・閉店後のスーパーの写真。</p> <p>・各自に配ったカードをコミュニケーションツールとして活用し、児童が自由に発言できる雰囲気を作る。</p>
かかわり合う	<p>●<b>生産現場</b>の紹介をする ・畑で野菜が育てられていたり、牛や豚、ニワトリが育てられたりしている。海では魚が獲られる。 ・形の悪い野菜は、味は同じでおいしいのに、捨てられることがある。小さな魚も同様に捨てられてしまうことがある。</p> <p>●<b>加工現場</b>の紹介をする ・野菜や肉、魚を切ったり大量に調理して缶詰にしたり、袋に入れたり、箱に詰めたりする。 ・箱がきれいなものしか買われないので、箱の汚れやパッケージの印刷のずれなど、捨てられてしまうことがある。</p> <p>●<b>流通現場</b>の紹介をする ・袋詰めされた野菜やパックに入った肉や野菜、牛乳やパン、お菓子やジュースなど、いろいろなものが売られている。 ・「賞味期限」や「消費期限」が古いものは、食べられる期間であっても売れ残ってしまい、捨てられることがある。</p> <p>●<b>消費現場</b>の紹介をする ・冷蔵庫や食品棚から必要な食材を取り出しおいしい料理をつくる。 ・せっかくおいしくつくってくれた料理でも、みんなが嫌いと言って食べなかったり、お腹いっぱいと言って食べ残してしまうと、捨てられることがある。</p> <p>●<b>どうする？食品ロスに対してできることは？</b> ・最後までたどり着いた人と食品ロスになった人の数をクラス全体で確認する。 ・今の気持ちを選び、クラス全体で共有する。 ・食べ物の旅をワークシートにまとめる ・日本や世界で起きている食の問題を知る</p>	<p>・形のわるい人参と小さい魚は教師とジャンケンをし、負けかあいこだと捨てられてしまう。</p> <p>・印刷のずれがある豆腐は教師とジャンケンをし、負けかあいこだと捨てられてしまう。</p> <p>・期限が古い鶏肉は教師とジャンケンをし、負けかあいこだと捨てられてしまう。</p> <p>・嫌いな人が多いピーマンと給食でたくさん残るお米は教師とジャンケンをし、負けかあいこだと捨てられてしまう。</p> <p>・グループ活動での児童の面考えを全員で共有する。 ・何ができるか、よりも「このままの生活を続けていくとまずいな」という意識をもたせる。</p>
まとめる	<p>●<b>振り返り</b>をする（記述） ・食品ロスについてわかったこと、考えたこと、もっと調べてみたいこと</p>	<p>・食品ロスの問題は、児童の将来にも関係がある身近な問題であることをもう一度感じさせる。</p>

口頭発表2

川に棲む生き物と共存できる社会を目指して、今自分たちがやりたいこと  
 かがやけ！ブルーリバー♡ハッピープロジェクト  
 ～大岡川でつながり合おう大作戦～

神奈川県横浜市立日枝小学校  
 校長 住田 昌治  
 教諭 渡邊 知和

1 はじめに

本校は横浜市南区にあり、まちの中に昔は内海だった川が流れ、繁華街が隣接している。学校を子どもたちにとって楽しい場所にしたいという思いから、生きる力をめざす教育課程の編成に際して、子どもの生活に密着して、その思いや願いを学習に取り込むことができる学校生活を創出することを前提とし、昭和59年度より34年にわたって、現在の「生活科・総合的な学習の時間」を核とする、望ましい教育課程のあり方の研究と実践を重ねている。

今年度は学校目標である「生き生き 日枝っ子」の姿を具現化し、どのような姿を「生き生き日枝っ子」として求めていくか話し合ってきた。本校は生活科・総合的な学習の時間を重点的に研究しているが、「生き生き日枝っ子」の姿はどの時間にも存在させたいと教師は考えている。学校全体が環境学習に取り組んでいるわけではないが、今の研究は、結果的には持続可能な開発のための教育を行っているといっても過言ではないと考える。子どもに寄り添って作られる様々な材の単元は、理科学習や社会科学習の内容と関連してきたり、キャリア教育と関連してきたり、子どもの生活に触れていく学習である。(平成30年度の研究は下の資料1の通りである)

資料1

<生活科>

クラス	単元名	活動内容
5・6・7・8・9組	「ひえパンマンパワーアップうどん！」	夏休みに考えたトッピングメニューをもとに、みんなで話し合ったり、M製麺さんからアドバイスをもらったりしながら、今まで作ってきたうどんをさらに工夫を凝らしたパワーアップうどんにしよう！
1年1組	「きらにこ☆しぜんとなかよし」	春は”さくら”、夏は”ヤマモモ・水”とたくさん遊んでなかよしになった子どもたち。秋はどんななかよしが待っているのかな。秋のなかよしをみんなに広めよう！
1年2組	「せかいに1つのぴかぴかフラワーで はないっばいになあれ！」	優しくしてくれた6年生や日枝っ子みんなに喜んでもらうため、町の花育て名人と関わりながら、春に咲く花を育てます。めざせ！せかいに1つの「ぴかぴかフラワー」で、はないっばい！
1年3組	「ぼかぼか♡きせつのおくりもの」 ～あきのおくりもの～	夏には、たくさんヤマモモとヤマグラの実で遊んだ子どもたち。あんなにたくさんあった実が「あれ？もうほとんどないね。」と、季節の移り変わりに気が始めました。秋にはどんなおくりものがあるかな。
1年4組	「いきものなかよしだいさくせん」	学校探検を通して身近に生き物がたくさんいることに気付いた子どもたち。もっと生き物となかよしになりたいという思いをもち、生き物を観察したり調べたりすることから活動が始まりました。
2年1組	「日えのまち『なかよしの花』をそだてよう」	日枝のまちで見つけたたくさん「？」を「！」にしなが『なかよしのたね』から芽が出てきたと実感した子どもたち。今度は花を咲かせたいと、気になるお店や人との交流を繰り返しながら『なかよしの花』を育てていきます。
2年2組	「日えのまちにスマイルパワーおとどけたい♪」	歌が大好きな子どもたち。野菜が元気に育つための歌を作ったり、お店のよさを伝える歌を作ったり…今度は、自分たちの歌で、まちの人となかよくなりた考え、スマイルパワーを発信していきます！
2年3組	「日えまち“しゅん”をつたえたい！」	まち探検や普段の生活の中で、自然の中以外にも季節を感じるものがあることに気付いた子どもたち…「あれ？この前あったお花が売っていないよ。」「お店の人が、ズッキーニは、夏が旬でおいしくて。」日枝っ子やまちの人たちにも、まちの旬を伝えよう！
2年4組	きらびか なかよし わくわく日えまち たんけんたい	まち探検で出会った中村橋商店街は、優しい人がいっぱいでした。大好きなまちの人たちとともとなかよくなりたくて、作戦実行レッツトライ！

## <総合的な学習の時間>

3年1組	「こまでつながる 日枝のまち」	国語の「こまを楽しむ」をきっかけに、こまにより興味をもった子どもたち。「もっとこまを上手に回したい」「いろいろな種類のこまを回したい」と、毎日とことん遊び、こまの魅力を感じてきました。「こまを通してまちの人を笑顔にしたい」とイベントの企画や準備に取り組んでいます。
3年2組	「つながるやさしさ 38キャンドルズめぐそーいやしーの光」	キャンドルを通して、火の温かさや、気持ちの落ち着きを感じて活動している。キャンドルを使ってまちを盛り上げる活動している人と関わって、キャンドルのよさをまちに広げたり、まちのためにできることに進んで参加したりしようとする。
3年3組	「ドキドキが止まらない 弥太郎最中本舗さん」	大正8年創業の和菓子屋、女性店主Sさんが一人で製造販売をしていることに興味関心が沸いた子どもたち。繰り返し関わっていく中、Sさんが作る粒餡に近付けたい気持ちになり、餡作りに奮闘中です。
4年1組	「めざせ！アイスマスター4の1」	アイスの日に馬車道に行ったことをきっかけに「誰が横浜で作ったの？」「昔のアイスってどんな味？」と疑問をもった子どもたち。疑問を解決する中で、アイスの歴史や先人の苦労を知りました。昔のアイス「あいすくりん」を生かしたオリジナルアイスを開発して、まちの人に喜んでもらおうと考えています。
4年2組	「めざせ スマイル工房」	日枝のまちには、材木店が多くあることに気付いた子どもたち。その端材を使って、クラス札を作り、「日枝っ子を笑顔にしたい。」という思いをもって取り組んでいます。
4年3組	「かがやけ！ブルーリバーのハッピープロジェクト！」 ～大岡川でつながり合おう大作戦！～	大岡川を知ったり、きれいにしたりする活動を通して、環境を守ろうと活動しているTさんや、NPO団体とつながっていった子どもたち。大岡川に棲む生き物も自分もハッピーになる活動をしながら、よりよい環境とは何かについて考え、自分がやりたいことに取り組んでいます。
5年1組	「SAKURA 救出プロジェクト」 ～桜のSOSに応えよう～	日枝のまちを流れる大岡川と言え桜。50年後、100年後の未来に大岡川の桜並木を残すために、地域の人や行政が努力していることを知った子どもたち。まちを明るくするために、自分たちができることは何か。皆で考えています。
5年2組	「作ろう！オリジナルせんべい」 ～世界一の団結 5の2米～	「自分たちで育てたお米でせんべいを作りたい！」という子どもたちの思いから、米作りとせんべい作りに挑戦しています。せんべいの生地作り、乾燥、焼き方にこだわって、自分たちのオリジナルせんべいをめざします。
5年3組	「日枝小もったいない大作戦！」 ～食品ロスを減らそう～	「食品ロス」が問題となっている世の中。自分たちの身の回りでもたくさん発生している食品ロス…。自分たちにできることから取り組み、多くのまちの方たちを笑顔でつなぎます。
6年1組	「お囃子でつながる日枝のまち」	お囃子で日枝のまちをつなげてまちを盛り上げたい！お囃子を聴くだけでなくまちの人と一緒に楽しめるよう、お囃子を広める、残す、つなげるをめあてて活動しています。
6年2組	「まちの魅力を発信！ヒエスタグラム」	写真を撮りながら日枝のまちの魅力を探す活動を通して、まちの魅力に気付き、その魅力を伝えていくために地域の人たちと関わりながら写真を活用したイベントを企画していきます。
6年3組	「Dream Jobs」 ～ぼくらの未来～	身の周りにいる大人は、なんでその仕事を選んだのだろう。聞いてみようよ！家族や町の人、僕のなりたい仕事についている人たちにも。そして、自分たちの手で、ぼくらの未来を創っていこう！

## 2 具体的な実践

〈単元の始まり〉

4年3組では今年度の「ともだち」（総合的な学習の時間）の時間に大岡川のごみについて学習を続けている。本校学区には二つの川（中村川と大岡川）が流れている。川があるものの、子どもたちは川で遊ぶ体験が不足し、川に親しんでいるわけではない。川を視界に入れて生活しているため、満開の桜が映る川面や、クラゲが沢山発生する川の様子、そして、埋まっている自転車などの大型ごみや、ごみが流れていく様子を見るなど、その都度姿を変える川は日常的な風景となっている。

社会科で吉田新田を学習したとき、自分たちが住む学区が昔は新田だったことが分かり、近所を流れる大岡川が実は入り海だったことを子ども達は学んだ。そんな中、大岡川は川とは言うけれども、本当はまだ海なのではないかといった疑問をもち始めた。それは、日々眺めている川にクラゲなどを発見し、川で見かける生き物が、海の生き物のように感じていたからである。

NPO 法人「濱橋会」が主催する、川に自作の鯉のぼりを架ける企画に参加し、自分たちが作成した鯉のぼりが泳ぐ姿を見にまち探検へ出かけた。自作の鯉のぼりを探しながら、大岡川の様子を観察して



写真1



写真3

いくうちに、クラゲや群れになった魚、大きな魚を発見した。それと同時に川に浮いているペットボトルのごみや、レジ袋などの白いプラスチックのごみも発見した。また、それだけではなく、さびて貝殻の張り付いた自



写真2

転車やタイヤ、オートバイが数台、川に埋まっている姿を発見した。生き物が生息することを確認しながら、ごみも発見した子どもたちは、生き物のごみとどうやって生活しているのか、更にそれは生き物のために嬉しいことなのかという疑問とともに、生き物のためにできることはないかと考え、単元がス

タートした。

〈学習の流れ〉

子どもたちはまずは大岡川が川なのか海なのかについての疑問をはっきりさせたいと考えた。そこで、大岡川について詳しい、水中カメラマンであり、NPO法人「海の森・山の森事務局」の理事長でもあるT氏に学校に来てもらい、大岡川について話を伺った。まず、大岡川は汽水域といって、山から流れる川の水と海から流れてくる海水が入り混じった川であるという説明を受けた。また、自転車やタイヤ、生活のごみと生息する生き物は嬉しいのかどうかといった子どもたちの質問にも、たくさんの資料を用意した、T氏の見解を聞くことができた。たくさんの資料にはビニル袋を餌と間違えて食べ、死んでしまった亀の話（写真4参照）や、T氏と共にSUP（スタンドアップパドルボード）の仲間とともに引き上げた、さび付いて貝殻の張り付いた自転車の話などがあつた。そして、川のごみはまちのごみが浮遊して川に流れ込んでくるということ、川のごみは海に流れ、海の生き物を困らせているという話も聞くことができた。そこで、TさんをはじめとするNPO団体が月一回のペースで行っている、川と川周辺のごみを取る活動、PGT大作戦（ペットボトルのごみ取ったどうだいさくせん）に参加することとなった。（写真8参照）



写真4

また学校近くで唯一川に触れあえる場所、アクアパークに入り、生き物はあるのか観察することになった。

アクアパークでの活動は触った水が潮の匂いがあることや、海にいるフナムシがいたり、蟹や小フグを捕まえたり、魚の群れを確認したりと汽水という川の様子と、その中で暮す生き物の存在を



写真6

体感することとなった。それと同時にごみの多さを目にすることとなった。

月一回のPGT大作戦に参加するとともに、自分たちも中心となってPGT大作戦をやろうということになった。そこで、Tさんにも声を掛け、アクアパークに近い蒔田公園とその周りのごみを取る



写真5



写真7



写真8

子どもたちは今まで、川にごみがあるのは、誰かがポイ捨てるからだと思っていた。そのような行為をする人を目にすることもあるが、たいがいは知らず知らずのうちに、まちのゴミが川に流れ込んでたまっていくことになるのではないかと実感していく。

煙草の吸殻の多さに驚いていたある児童の振り返りカードには、

「タバコが捨ててあるのははじっこもしくは草の中に良く捨ててあると感じました。子どもはタバコを吸わないので、大人が捨てているとい

うことになると思いました。なぜそのような場所にかくすもしくは捨てるのか、わたしは考えました。わたしの想像ですが、大人たちもタバコを捨ててはいけないと分かっている、はずかしいなど思っ

てはしっこに捨てていると思いました。」とある。これは自分たちが出さない煙草のごみが沢山、それも取りにくい所に見つけた結果出た感想である。一方で、月一回のPGT大作戦でNPO法人の大人たちと関わったり、クラスみんなと協力したりしてごみを集めることが楽しくなり、ごみが少ないと寂しいと発言する姿も見られることとなった。これは川をきれいにしたいという現れととらえているが、子どもたちは、自分たちがごみを出す

人だという認識はなかなか育っていなかった。そこで PGT 大作戦で集めたごみについて詳しく分析する機会をもち、どんなものがまちに捨てられているのかについて考える話し合いを行った。

(資料 2 参照)

資料 2

PGT 大作戦で集まったごみ

(kg)

日にち	5月19日	6月14日	7月21日	8月25日	7月9日
場所	桜栈橋	桜栈橋	桜栈橋	桜栈橋	蒔田公園
総量	51.189	22.096	39.018	52.136	7.905
ビン・缶・ペットボトル	16.98	8.34	8.72	22.14	0.79 ペット 13 本 スチール缶 17 本 アルミ缶 28 本 金ぞく片 13 個
紙ごみ	10.38	4.96	7.94	3.14	0.98
プラスチック	18.04	4.24	13.3024	15.84	1.42 レジ袋 27 枚 食品容器 29 個 お菓子の包み袋 120 個 花火の包装紙 31 枚 ペットボトルキャップ 23 個 ストロー 5 本 プラスチック片 46 個 ナイロンネット 1 枚 風船片など 46 個
吸いガラ	0.849 (8490 本)	1.056 (10560 本)	1.157 (11570 本)	0.576 (5760 本)	0.295 (738 本)
その他	4.94	3.50	7.899	10.44	4.42

そこではプラスチックごみの分析から、自分たちの生活を振り返り、ごみが川に流れ、海まで到達することを想像することができた。T氏が前回の出前授業で、プラスチックがマイクロプラスチックになり、生き物の体に入っていくことを学んだ子どもたちは、プラスチックについてとても敏感である。

この時、子どもたちからレジ袋を使っているかいけないかという話題が出た。スーパーやコンビニエンスストアに行ったとき、エコバックを持っていく家庭は意外に少ない。家にいつの間にかレジ袋が溜まっているとつぶやく子どももいた。コンビニエンスストアに行ったとき、どのようなときにレジ袋を活用するのがよいのかと問いかけると、買う物が思ったより多くなったとき（手で持てないとき）や、エコバックに入りきれないときなどの返答があった。レジ袋をもらわない方法を考えるよいチャンスであった。「必ずエコバックを持っていくようにするにはどうするか。」と尋ねると、「レジ袋が高かったら、絶対もらわない。エコバックを持っていく。」「私も 100 円、いや 500 円したら絶対にももらわない。」の返答に、ほとんどの子どもが頷いた。「実質 6



写真 9

円くらいのレジ袋に対し、500円の対価をつけるのはスーパーやコンビニエンスストアが得をするね。」と問いかけると、「何かお金を得る方法を考えるといいよ。」と答えが返ってきた。以前のT氏の出前授業の際に聞いた、ドイツの行っている環境対策の一つで、ペットボトルを集めて箱に入れると、お金の換金できるレシートが出てくる機械（写真9参照）があるのだが、それを作る費用にすればいいという声が上がった。そうすれば、みんなペットボトルを拾ってお金に換金するのだそうだ。

子どもたちはレジ袋やペットボトル以外では、ニュースなどから、プラスチックのストローについても興味をもち始めている。麦藁で作られたストローを見て、「本物そっくり。」との声が上がった。本物は麦藁のストローの方であることを説明したが、実感が伴わない。ただ、麦わらのストローのよさ、自然物であるから、土にかえることなどを説明した。また、ストローにできる麦わらがなかなか手に入りづらいことや、一本のストローになるまで人の手がとてもかかり、コストがプラスチックのストローよりも高くなることを伝えると、「ストローを使わなければいい。」との声が上がった。子どもたちは現在、給食中に『ストローを使わない大作戦』を実践している。教師からは衛生面に気を付けることを指導している。子ども達から出た『ストローを使わない大作戦』の方法として、

- ・紙コップを使う → 毎日変えられて衛生的だけれど、紙のごみが増える。
- ・ストローを洗って使う → きちんと洗えないから衛生的ではない。
- ・うがいのコップを使う → 給食袋を毎日持って帰らない人にとっては衛生的ではない。
- ・牛乳パックの片方を開いて、直接飲む → うまく開けないとこぼれる。

ひとまず1週間試してみながら、いろんな方法にチャレンジしていきたいと考えている。

#### 〈経過考察〉

この単元を通して、子どもたちに川の環境を自分事として捉えさせたいと教師は考えているが、なかなか自分事にならない。PGT大作戦をやっても、私たちではない誰かが汚すからやっている、だから、まちの人たちに川を大事にしようって伝えなければ…といった考えにつながっていく。それでいいのだろうか。子どもたちにとって川はなかなか触れることのできないものであり、目で楽しむものになっているが、アクアパークで生き物に触れることによって川を楽しむ体験ができた。講師から、まず、川を大好きにならないと川を大事に思う思いが芽生えないのではないかと助言があった。助言を受け、上流に行って川にいる生き物と戯れ、下流との川の違いも体感した。川が楽しいものであると実感している。子どもたちからは、川のスタート時点に行ってみたいと声が上がっている。川を知り、川を好きになることによって、大好きな川のことをみんなに伝えたい。また、大好きな川を自分たちが大事に思う思いを伝えたい。そして、川を通じて、川を愛する多くの人々とつながり、川を大事にするために自分がやれることは何か、やってみたいことは何かについて深く考えるようになるのではないかと期待している。

この単元の後半は、子どもの伝えたい思いを高め、様々な場所での発表ができるようにと発表の場を用意はしているが、その活動も絶対ではない。子どもが主体的に動き、探究的に学びを深められるようにする。子どもの必要感を感じる思いに寄り添っていきたい。子どもたちが川を大事に思う思いが基盤となり、そこに棲む生き物と共存することを考え続けられるような終末を迎えられるよう、指導・支援をしている。

# 「SDGsの達成に向けた学校教育の取組」 —カリキュラム・マネジメントの工夫と主体的・対話的で深い学びの実践—

東京都大田区立大森第六中学校

校長 松尾 廣文

指導教諭 柴崎 裕子

## 1 はじめに

本校が、ユネスコスクールに加盟をしたのは、平成23年1月のことである。

不幸にもその直後、毎年修学旅行で訪れている東北に大震災があった。この国に再び光を掲げる人材を輩出するためにも、持続発展教育は必要である、このことを深く胸に刻み、大森六中はユネスコスクールとしてESDの推進を図ってきた。

その間、平成28年度からは、文科省委託ESD重点形成事業サステナブルスクールに認定され、同じくユネスコ・パリ本部より気候変動に関する実践校（ASPnet 機関包括的アプローチ実践プロジェクト）にも指定をされている。

研究前期では、地域の教育力を積極的に取り入れることにより、大森六中の特色ある教育活動である環境教育、防災教育、国際理解教育、生命尊重教育が生み出された。

研究後期に当たる平成26年度以降は、ESDの推進を図るための授業改善に取り組むことに力点を置くようにした。

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を達成するための指導方法の工夫・改善が指摘されている。

本校では、授業改善のアプローチ方法として、持続可能な社会の担い手として必要な「思考力」「コミュニケーション力」「判断力」の育成を主眼とした指導過程、指導形態の工夫を各教科で行い、その検証を行ってきた。

この実践により、日々の授業で生徒の「主体的・対話的」な学習が行われ、本校独自の「ルーブリック評価」からは、振り返りによる「深い学び」が生徒の内面に形成されていることが推測できる。

また昨年度より、2030年までに達成すべき持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals 以下SDGs）の取組へと研究の視点を拡大している。今の中学生は、健康・安全に留意すれば、22世紀を見ることも可能な人たちである。但し、この世界が2030年アジェンダを達成し、持続可能であるという仮定条件でのことである。

今回の研究では、カリキュラムマネジメントとして本校のSDGsカレンダーを作成し、小中一貫への可能性に触れることで、更に今後の研究の方向性を明らかにすることに努めてきた。

このように、本研究は、従来の本校のESD研究の枠を超えた、極めて汎用性の高い実践になる可能性をもっていると考える。

## 2 ESDの視点に立った学習指導の目標と評価

ESDの目標として、「すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと」（「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議2006）があげられる。

そこで、各教科等の授業の中でESDの視点に立った学習を展開する目標を「持続可能な社会づくり

にかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること」と設定した。そして、各教科等の学習活動を進める中で、この目標の達成をねらいながら授業設計や授業改善を行うことが、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うことに資すると考えた。こうした考えに基づいた、ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組みが表1である。

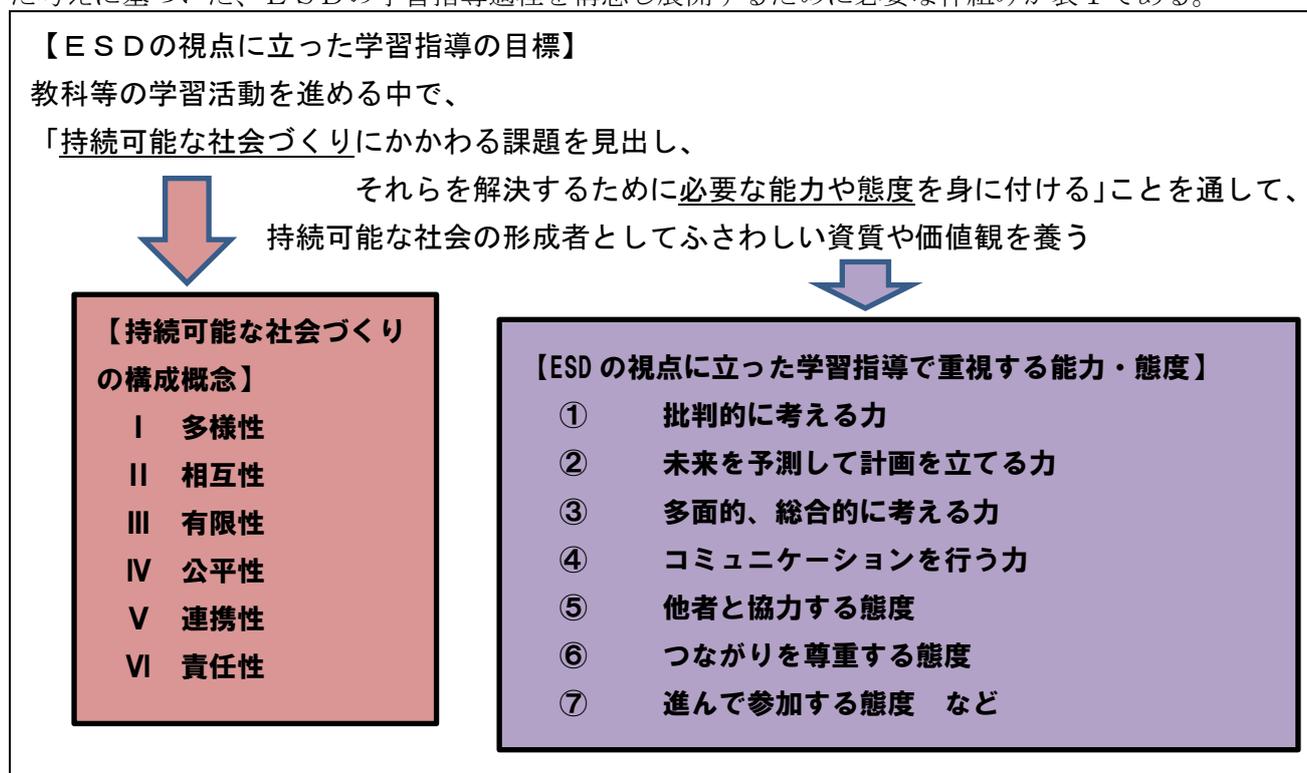


表1 ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み

(「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」(最終報告書) 国立教育政策研究所 2012)

この構成概念とESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度は、ユネスコスクールに加盟した当時から継続しているが、次期学習指導要領の解説が発表され、さらにこの能力と態度を明確に位置づけすることで、本校の研修の柱となっている。

右の表2は、新学習指導要領での、育成を目指す資質・能力の3つの柱を表した図である。「理解していること・できることをどう使うか」の柱に、「思考力」、「判断力」、「表現力」が挙げられており、本校の校内研修でもそれに対応して3分科会を設置し、授業改善のための研修を進めると共に、授業効果の測定のためのルーブリックを開発した。また、「学びに向かう力、人間性等」の柱については、表1「ESDで育てる態度」であげている、「他者と協力する態度」「つながりを大切にする態度」「進んで参加する態度」を育てるためのルーブリックを開発した。「何を理解しているか、何ができるか」は、日々の授業で基礎・基本の定着を図った。

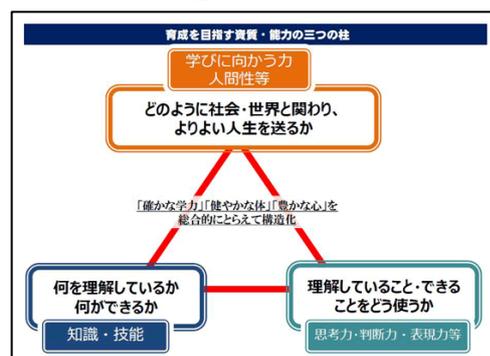


表2 育成を目指す資質・能力の三つの柱

次の表3ルーブリックを実施することで、生徒は自己変容に気づき、各教科単元ごとのふり返しを行う。自分がどの場面で頑張り、成長を感じたかを改めてふり替ることで、次への課題とすることができる。また、教師はこれが授業改善へとつながり、授業力を高める工夫につながっている。



#### 4 具体的な実践

##### (1) 授業で扱う環境教育

本校は、ユネスコスクールに加盟して以来、ESDカレンダーを作成し、カリキュラムマネジメントを行っているが、昨年度より、SDGsカレンダーへと発展させている。全教科でSDGsに取り組み、カリキュラムマネジメントを図っている。環境教育に関連する項目は、理科はもとより、国語科、社会科、技術科、家庭科、保健体育科、英語科、などクロスカリキュラムによる関連付けで、生徒の深い学びにつなげている。

##### (2) 学校全体で取組む環境教育

###### ア：生徒会による洗足池清掃

毎週金曜日始業前、生徒会主催で近隣公園である洗足池公園の清掃を行っている。毎週行っていることで、ごみの全くない日もあるが、生徒は継続していくことの大切さを知っている。その甲斐もあり、区や地域の方々が挨拶をしてくださり、生徒の意欲につながっている。

###### イ：小中連携による清掃活動

毎年夏休みに、校区の小学校と連携して、近隣地区の清掃を行っている。中学校の生徒会が小学校の児童会と連携し、ごみ拾いや草むしりを行うことによって、地域全体で環境に留意するような活動になっている。

##### (3) 部活動で取組む環境教育

###### ア：ホテル復活プロジェクト

自然科学部によるホテル復活プロジェクトは7年前より始まった。洗足池に水生植物園を造園し、そこに校舎内で9か月間飼育したホテルの幼虫を最終齢で放流する会を、毎年6月に行っている。地域の方が大変楽しみにしている。このプロジェクトには大田区都市基盤整備部、社団法人洗足風致協会、横浜ホテルの会の支援を受けることで、生徒の意欲を高める活動になっている。

ホテルは環境指標生物で、水、土、空気がきれいでないとは生育しない。ホテルが自生するまでには環境整備が必要で、自然科学部の生徒が毎週、池の水質検査、樹木調査、土壌調査をしながら、環境調査を行い、地域に発信している。

夏休みには、地域の小学生を招き、自然講習会を開き、ボート講習会と共に、自然科学部の日頃の調査結果を発表している。地域全体で自分たちの環境を守る働きかけになっている。

The image shows a detailed 'SDGs Calendar (3 years)' grid. The grid is organized by month (from January to December) and by subject (国語, 社会, 理科, 家庭, 英語, 音楽, 美術, 体育, 保健, 総合). Each cell in the grid contains specific activities, lesson plans, or projects, often accompanied by the corresponding SDG icon. A legend at the bottom right explains the color coding for different types of activities: blue for '総合的・体系的な能力' (comprehensive/systemic skills), yellow for '多面的・創発的な能力' (multi-faceted/creative skills), red for '判断力 本音を平議して判断を立てる力' (judgment force, ability to discuss honestly and make judgments), green for 'コミュニケーション能力' (communication skills), and orange for '二重ループ学習' (double-loop learning). The legend also includes a note: '※ 各項目にはSDGsのアイコンが複数表示されている場合があります' (Note: Some items may display multiple SDG icons).

表4 3年 SDGs カレンダー

#### (4) ボランティア「農援隊」が取り組む環境教育

##### ア：近隣駅前花壇整備活動

本校のボランティア団体「農援隊」は、近隣の駅前花壇整備活動を毎月1回行い、地域の環境整備に貢献している。地域の商店街が中心となって、NPOや区に支援をいただいている活動である。地域の方から「いつもありがとう」「ごみが減った」「花がきれいで、うれしい」などの声が上がリ、生徒の活動意欲が高まる。

その活動から、多くの方から声を覚えていただき、洗足池の樹木プレートづくり、お祭りの神輿担ぎ、など、活躍する場所をいただくことにつながっている。

##### イ：ゴーヤグリーンカーテン設置

秋になると校庭に20本ほどの桜の落ち葉を朝始業前にボランティアで掃き掃除を行う。その落ち葉は校庭に設置されたミミズコンポストで腐葉土になる。その腐葉土で育てたゴーヤの苗を、教室前のテラスに、グリーンカーテンとして設置する。冷房設定温度を少しでも高くしようという試みである。全校で収穫したゴーヤは9月最初の給食で食材として使用され、夏の終わりを生徒たちは味わう。

また、落ち葉掃きの最後は、地域の小学生を招き、焼き芋大会を生徒会主催で行う。全校生徒で落ち葉掃きを行ったご褒美で、笑顔のあふれる行事となっている。

## 5 成果と課題

学校全体で取り組んできたSDGsを意識してきた成果が、昨年度地球温暖化防止活動環境大臣賞受賞、低炭素杯2018ファイナリスト出場最優秀地域・学校エコ活動賞受賞につながった。低炭素杯2018の副賞として、地域温暖化防止コミュニケーターで、元気象キャスターの岩谷忠幸氏の出前授業の機会をいただくことになり、その講演会で全校生徒が、今のまま対策を何もしないままであると、2100年には年平均気温が4.8度上昇することに触れ、今後我々がとらなければならない対策として、節約と適応であることを、生徒は学んだ。

全教科でカリキュラムにSDGsを組み込み、学校行事や教科外活動で地球全体の課題となっている温暖化やごみ問題、等について意識をもって、持続可能な社会への取組について発信する力を生徒が持てるようになった。

毎年本校で行っているESD生徒アンケートで、「いろいろな人の考え方や社会との関わり、自然とのつながりなどを考えて、自分の今の行動を見直す行動ができる。」についての回答では、例年肯定的な回答が80%を超えているが、昨年の2年と今年の3年(同対象者)の比較において数値を伸ばしている。(表5)

今後、人や社会、自然環境とつながりの中で、学びの深化と、自分の行動が多くのものに影響を与えることを体得することが期待される。



低炭素杯2018発表の様子

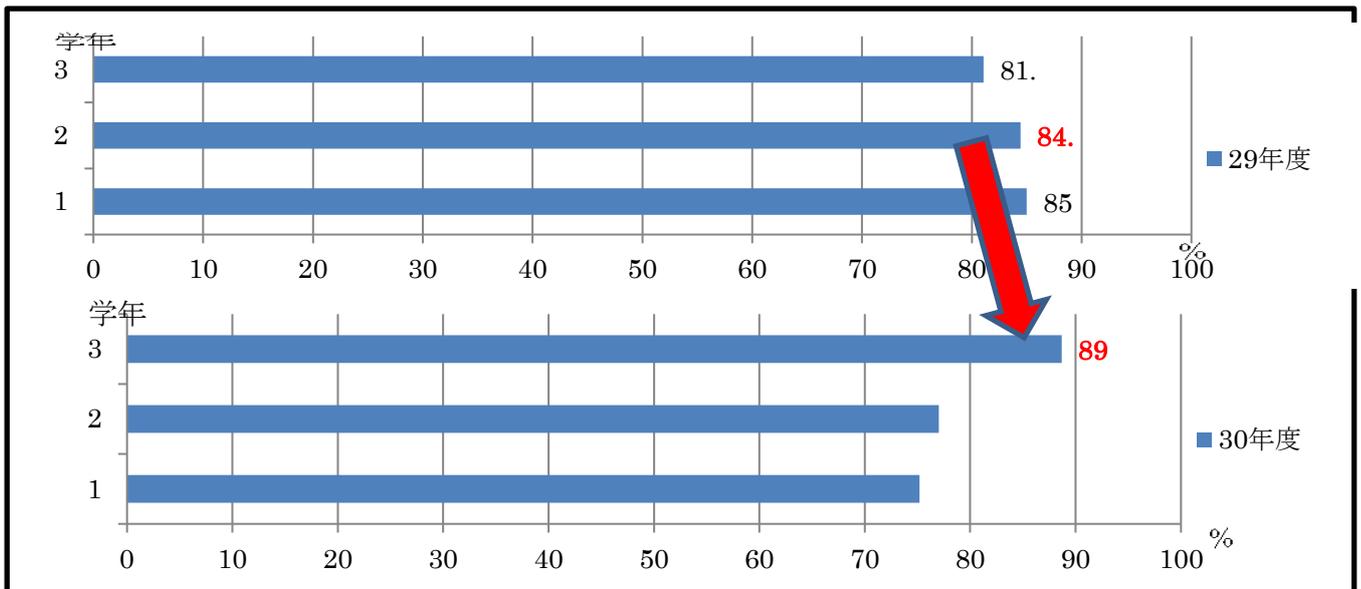


表 5 いろいろな人の考え方や社会との関わり、自然とのつながりなどを考えて、自分の今の行動を見直す行動ができる

さらに、「集団における自分の役割を理解し、物事に主体的に参加することができる。」の設問においても、集団における自分の役割を理解し、物事に主体的に参加できている姿が形成されつつあることに、本研究の大きな成果を感じる。

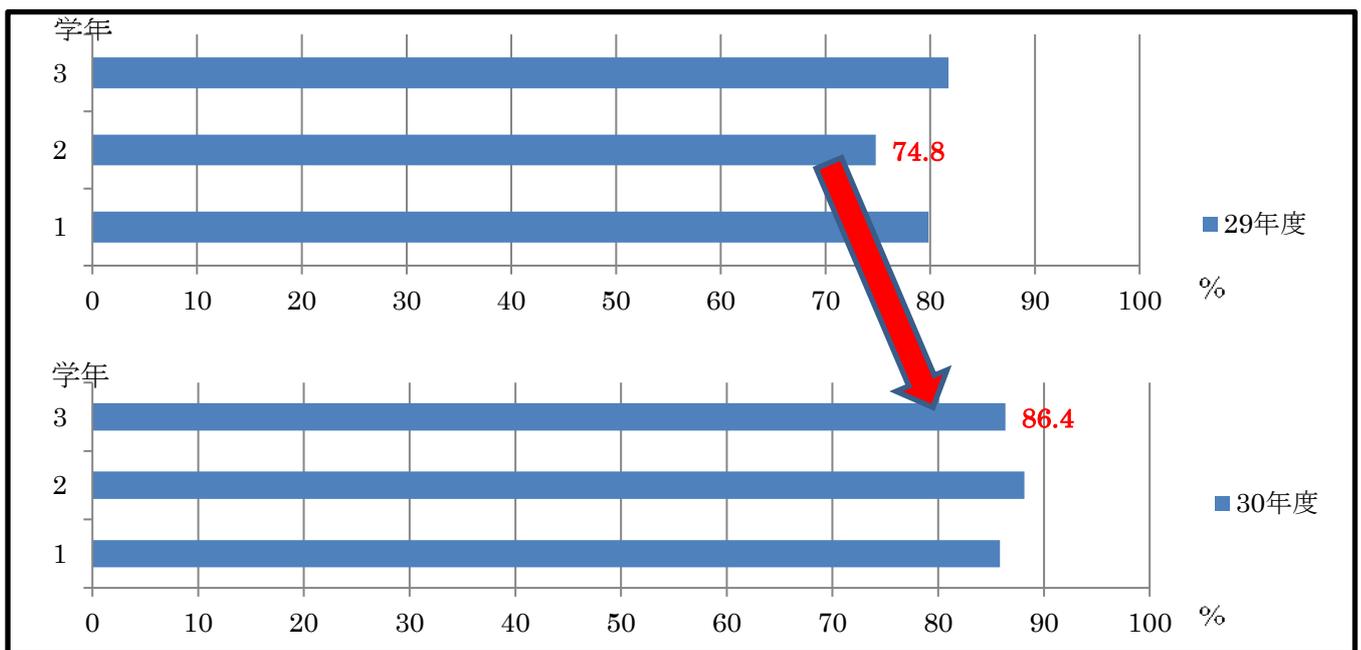
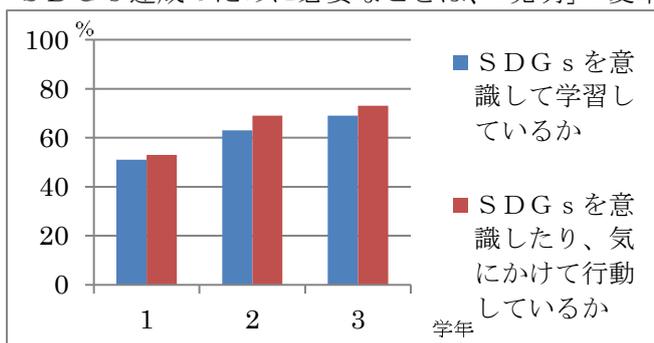


表 6 集団における自分の役割を理解し、物事に主体的に参加することができる

SDGs 達成のために必要なことは、「発明」「変革」「キャンペーン」が必要とされている。中学生



が今できることは、学校で多くのことを学び、経験することで、「発明」や「変革」を起こす手がかりを身につけ、実際に行動できる実行力を身につけることである。そうして実行力を身に付けた社会人が、地球の環境を守る担い手となると考える。

## 誌上発表1

# 持続可能な社会づくりについて自分の考えをもち、行動する児童の育成 「守ろう環境！白銀川・隈川探検隊」

福岡県大牟田市立吉野小学校  
校長 坂本 智典

## 1 はじめに

本校では、平成24年から、生活科・総合的な学習の時間を中心に、学習のテーマを「エネルギーを軸とした環境教育」「我が国の地域の文化・歴史等と外国の文化歴史等についての理解を深める国際理解」「自分の命・成長や福祉について理解を深める生命（いのち）」に重点化して持続可能な開発のための教育（ESD）に取り組んできた。

また大牟田市では、「まちづくりは人づくりから」という基本的な考え方にたち、持続可能な社会の担う子どもたちの育成を目指しており、平成23年には市内の全小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟し、ESDの推進に取り組んでいる。

このような取組を通して、児童は、友だちのよさを実感したり、地域への愛着を深めたりすることができてきている。これは、友だちや地域のつながりを大切にして協働で課題解決を図る場面を仕組んだり、ESDの視点から地域にある素材の教材化を進めてきたりしてきたからであると考えられる。

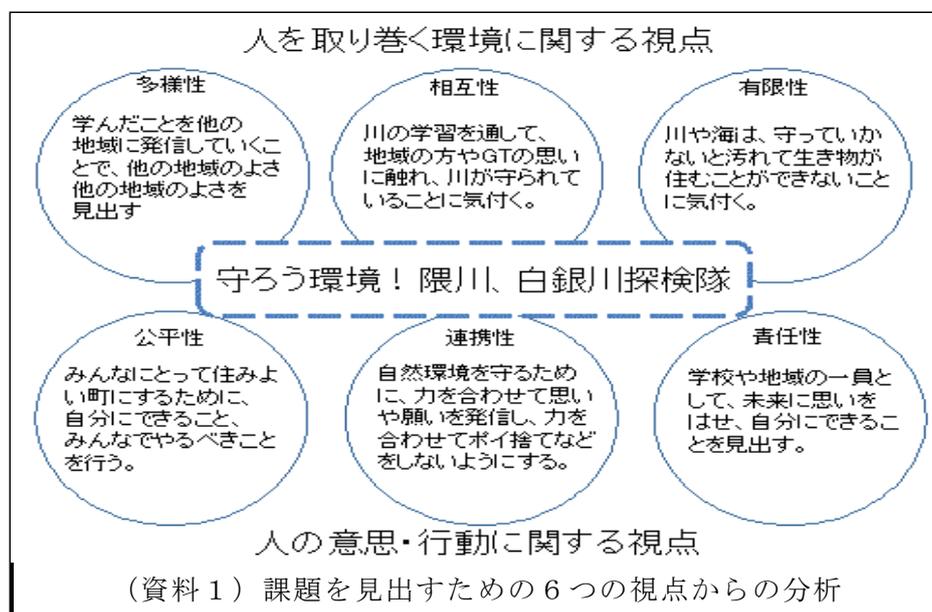
## 2 総合的な学習の時間における取組

### (1) 6つの視点からの教材分析

持続可能な社会づくりにつながる価値観を身につけさせるために、まず、地域における素材を「持続可能な開発のための教育（ESD）はこれからの合い言葉」国立教育政策研究所(平成27年3月)において示されている持続可能な社会づくりに関わる課題を見出すための6つの視点から教材分析を行った。次に、児童の実態や取り上げる対象に応じて重点化を図り、単元で目指す姿（指導内容）を検討した。その後、ESDで身につけさせたい8つの能力・態度の中から、児童にどんな能力・態度を身につけさせることができるのかを検討し、単元目標の吟味を行った。さらに、身につけさせたい能力・態度を育む活動を意図的に位置づけ、単元計画を作成した。

具体的には、第5学年「守ろう環境！白銀川・隈川探検隊」（環境）を例に使って説明すると、

- ①児童の活動を想定し、持続可能な社会づくりに関わる課題を見出すための6つの視点に沿って予想される活動を書き出す。（資料1）



- ②児童の実態や地域性を考慮し、「相互性、連携性、責任性」に重点化を図り、目指す姿を決定

目指す姿	持続可能な社会づくりの要素
吉野校区を流れている白銀川や隈川の調査や水の汚れの原因を調べることを通して、川の環境の変化が自分たちの生活と深く関わっていることに気づき、地域の環境を守るために自分たちにできることを考え、進んで行動しようとするすることができる。	相互性、連携性、責任性

- ③ESDで身につけさせたい能力・態度の面から単元の目標の決定

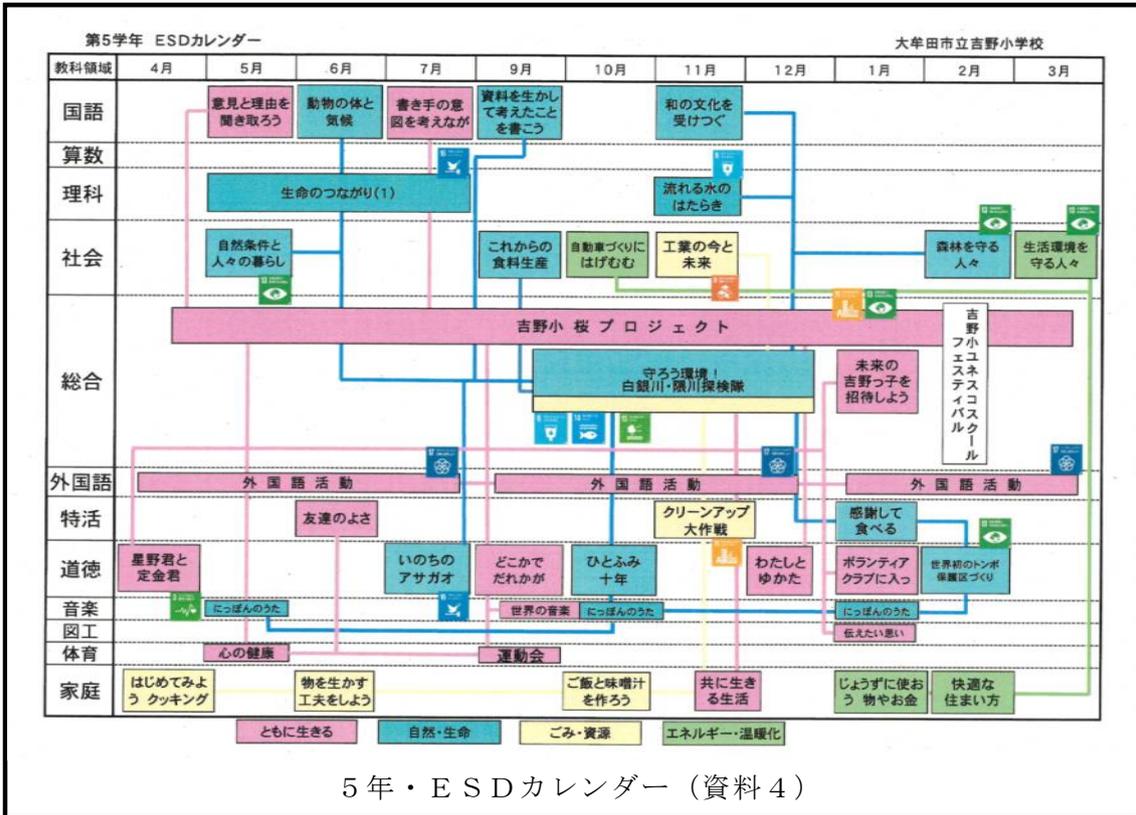
単元の目標(資料3)	ESDで身につけさせたい能力・態度
○人と自然の共存などを体験的に学ぶために、隈川や白銀川を探検して自分たちの活動を振り返り、隈川や白銀川の身近な環境を大切にしようという学習の課題を見いだすことができる。(問題設定の能力)	②未来像を予測して計画を立てる力
○課題について調べたことをもとに自分の考えをつくり、調べたことを関係づけて考え、根拠を明らかにしながら自分の考えをつくったり、調べた事象や互いの考えを整理・分析したりしながら、地域を流れる川の環境をよくしていこうと考えることができる。(学び方・考え方)	①批判的に考える力 ③多面的、総合的に考える力
○GTの柿川さんと一緒に水生生物探検をしたり、水質調査実験を行ったりして、校区の川を生き物の住むきれいに川にしたいという気持ちを持ち、自分たちも地域の一員として何かできることはないかみんな考えて考えることができる。(問題解決の能力)	④コミュニケーションを行う力 ⑤他者と協力する態度
○身近な自然環境を大切にしたいという思いを持ち、自分たちにできることを考え、その考えに基づいて実践し、環境を守っていくことの大切さを地域の方々に伝えることができる。(自己の生き方)	⑥つながりを尊重する態度 ⑦進んで参加する態度

## (2) ESDカレンダー、ストーリーマップを活用した教科横断的な学習

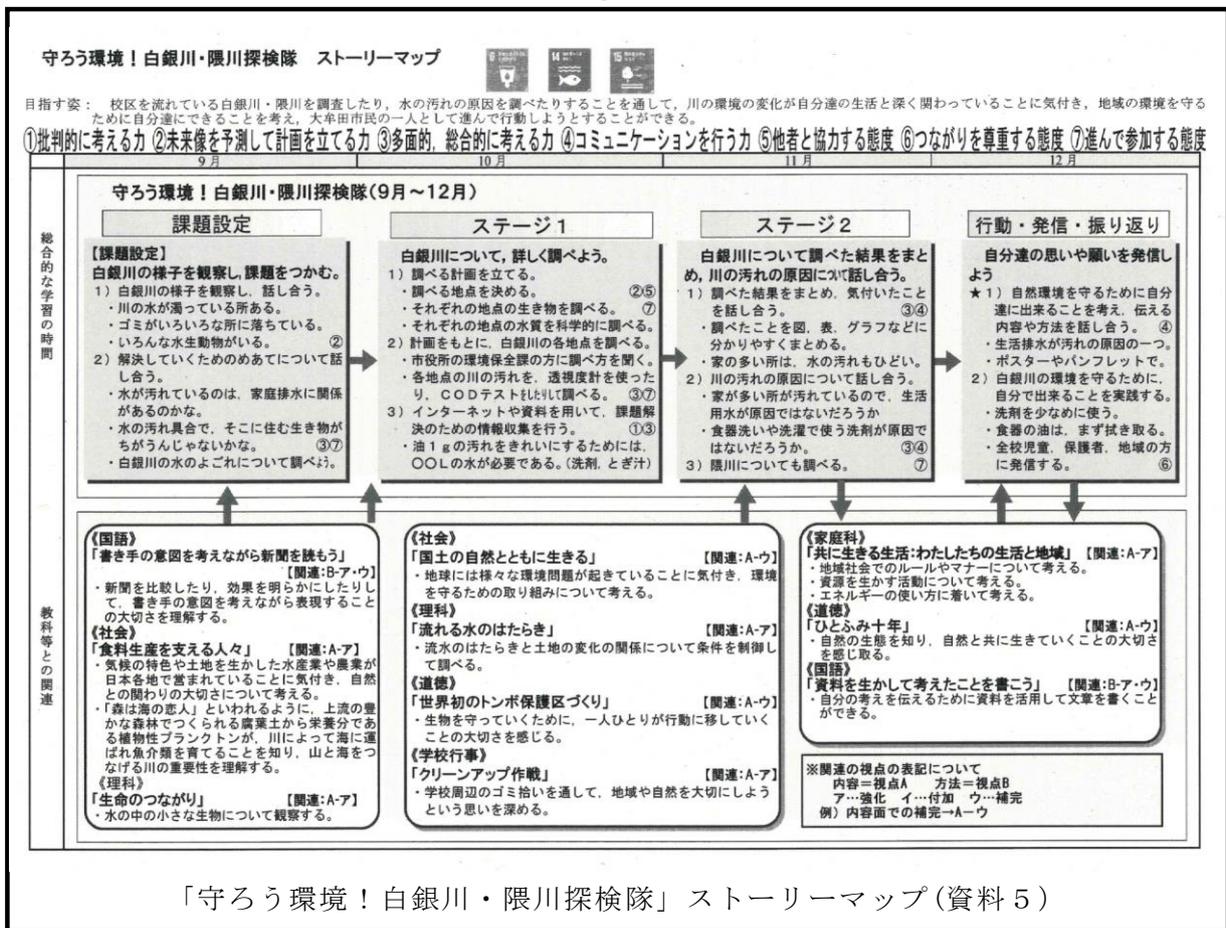
1年を見通した教科横断的な学習を展開するためにESDカレンダー(資料4)を作成した。

さらに、より具体的に見通しを持って指導に当たることができるように、単元ごとにストーリーマップ(資料5)を作成した。このストーリーマップは、児童の意識の流れを大切に生活科、総合的な学習の時間における学習の流れとESDで身につけさせたい能力・態度を重点的に育む活動について明記した。その際、児童の意識が連続・発展していくことを大切に、4つの段階として「課題設定」「ステージ1」「ステージ2」「行動・発信・振り返り」の各段階を設けた。

また、他教科との関連においては、関連の意図が明確になるように、学習内容と方法・内容面からの関連を図った。



5年・ESDカレンダー（資料4）



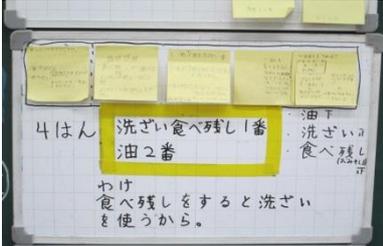
### 3 5年「守ろう環境！白銀川・隈川探検隊」の実践

#### (1) 教材について

吉野校区を流れる川は、白銀川と隈川である。両方ともその上流は上内地区にある。周りの自然環境は豊かで、川幅は狭いがカワニナ、沢ガニ、オイカワなどの魚が生息している。透明度の高い水が流れ、主な用途は農業用水である。白銀川の中流は、吉野校区の白銀調節池公園から橘中学校付近であり、隈川の中流は、吉野校区の怒縄田から亀崎にかけてである。どちらも周りに住宅地があり、水は少し汚れている。ゴミなどのポイ捨てが目立ち、その中には自転車などの大型投棄物もある。ドンコやコイなどの水生生物が生息している。白銀川の下流は手鎌地区の角平橋付近で、隈川の下流は倉永地区の西鉄渡瀬駅付近である。川幅は広く、水は汚れている。4年生の時の「生き生きビオトープ大作戦」の活動や5年生の「桜プロジェクト」の活動から意識が芽生え、吉野校区の「川」の環境をよくしようという活動につなげている。

#### (1) 単元計画（全15時間）

段階	時間	主な学習活動	身につけさせたい態度・能力	主な手だて・関連
課題設定	①	1 体験を振り返り、課題をつかむ。 ○ 4年生で吉野小ビオトープを管理してきた自分たちの活動を振り返り、身近な環境について考え、白銀川の水質や生き物について調べる計画を立てる。 <b>白銀川の生き物について調べよう。</b>	○ 昨年の取組をもとに、校内から校区に視点を広げ、身近な環境に関心を持ち、学習課題をつかむ。	○ 昨年のビオトープの学習を想起させ、地域を流れる白銀川に目を向けさせる。 <b>学校行事</b> <b>親子除草作業</b> ・親子で校内美化活動を行う。
ステップ1	②	2 課題について考えたり、調べたりする。 ○ 白銀川を探検したり、採取した白銀川の水をGTと水質調査（パックテスト・透視度）をしたりして、川の水を調べる。 ○ 隈川についても、白銀川と同じように調べる。 ・透視度、CODテスト  ＜GTと生き物採取＞	○ 調査活動にて、自然環境が変化してきていることに気づく。また、GTの話から、昔と今の川の様子の違いを理解する。	○ 白銀川の上流と中流、今と昔を比較させ、水の汚れの原因に着目させる。 <b>国語</b> <b>森林のおくりもの</b> ・緑豊かな国土に生まれたことへの感謝と森林を育てる仕事のすばらしさを考える。
	②	○ 身近な自然環境がどのような状況であるかをインターネットや資料を活用して調べる。	○ 自分が知りたいことを調べる計画を立て調べる。	<b>道徳</b> <b>世界初のトンボ保護区づくり</b> ・自然の偉大さを知り自然環境を大切にする。
	①	○ 調べて分かったことや自分の考えをまとめる。	○ 調べて分かったことをカードに書き自分の考えとしてまとめる。	

<p>ステ ー ジ 2</p>	<p>3 調べたことを表に整理・分類しまとめる。</p> <p>① ○ 調べて分かったことを出し合い、川の汚れの原因に気づく。</p> <p>【川の汚れの原因】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活で使った水を川に流している</li> <li>・食べ物の残りや食用油を流している</li> <li>・ごみのポイ捨て</li> <li>・ごみの不法投棄</li> <li>・使った農薬が雨と一緒に流れ込んでいる</li> <li>・雨と一緒に土が流れ込んでいる</li> <li>・工場で使われた水を流している</li> </ul>  <p>&lt;個人で原因の分類&gt;</p>  <p>&lt;GTと原因の分析&gt;</p> <p>白銀川を守る活動を考え、実践しよう。</p> <p>① ○ 伝え合った内容をもとに、身近な自然を守っていくために、これから自分たちにできることや自分たちで取り組みたいことを話し合う。</p>  <p>&lt;ボックスチャートの活用&gt;</p>	<p>○白銀川を生き物の住みやすい川にしたいという共通の思いに気づく。</p> <p>○自分の考えを明らかにし伝える。</p>	<p>○視点を示し、話し合いの見通しをはっきりさせる。</p> <p>○出てきた考えを観点を決めてボックスチャートに整理させる。</p>  <p>&lt;ボックスチャートの活用&gt;</p>
<p>行動</p>	<p>4 身近な自然を守るためにみんなでできることを考え、取り組みの計画を立て実践する。</p> <p>① ○ いろいろな生き物が住める白銀川にするために明らかになった課題をもとに、「自分で」「みんなで」できることについて考えを出し合い、整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・食器を洗うときは、あまり洗剤を使わないようにする。</li> <li>・ごみのポイ捨てをしないように呼びかけるポスターやリーフレットを作る。</li> </ul>	<p>○生き物の住める白銀川にするためにどんなことができるか根拠をはっきりさせて、友達と話し合い考えを整理して、実践の計画を立てる。</p>	<p>○自分の考えをワークシートに書かせ、座標軸を使い、継続可能か、みんなへの広がり期待できるかという視点から交流させる。</p>

	課外	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川の周りのごみを拾う。</li> <li>・新聞を公民館に掲示してもらう。</li> </ul> <p>○ 「自分で」「みんなで」できることを考え、実践する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭での実践</li> <li>・地域での実践</li> </ul>	○ 地域のためになることを友達と協力して実践する。	○ 実践計画をもとに実践の状況を定期的に振り返らせ、目的意識を継続するようにする。
発信	①	5 自然環境を守るために取り組んできたことや自分たち（個人・学級）の思いや願いを発信する	○ 吉野校区の自然環境を大切にしていこうという思いを伝える。	○ 思いや願いが伝わるように目的意識や相手意識を明確にして、資料の提示や表現の仕方を工夫させる。
振り返り	①	6 学習を振り返り、地域の自然環境を守ろうとする気持ちを高める。	○ 地域の環境を守りたいという思いを高める。	○ 自分の考えを明確し、学習の振り返りをさせる。

#### 4 成果と課題

##### (1) 成果

- 「守ろう環境！白銀川・隈川探検隊」の実践の活動を通して、川の環境を改善するために、自分にできることを実践し、地域の人々と力を合わせながら、活動しようという意識が高まった。【連携性・責任性の向上】
- それぞれの考えを整理したボックスチャートを用いた交流を通して、話し合いの仕方が向上し、一人一人の思いや考えを知り、互いの考えを尊重しようという意識が芽生えてきた。【コミュニケーションを行う力・批判的に考える力の向上】
- 作った考えや自分の思いを実現させつための実践活動や学んだことや思いや願いを発信する活動は、学びのよさを実感させていく上で有効であった。

##### (2) 課題

- 現状から課題を見だし、問題解決のための方途を主体的に考える力の育成。  
【未来像を予測して計画を立てる力】
- 自分の考えを積極的に実践する力とその実践を振り返り継続・発展させる活動の充実。【つながりを尊重する態度、進んで参加する態度】

#### 5 おわりに

持続可能な社会づくりについて自分の考えをもち、行動する児童の育成をめざし、研究を進めてきた。環境学習を進めていく中で、「問題となることは何か」「どうすれば解決できるのか」を協働で考える姿が見られるようになった。また、地域の方との関わりが深まり、児童が地域の行事などに関心をもち、積極的に参加する姿が多く見られた。本年度は、大牟田の他の学校と交流し、大牟田の3つ川の様子を知り、環境を守ることに深く考えることができるように計画をしている。

## 環境省 ESD 環境教育モデルプログラムの実証と SDGs を踏まえた環境教育

秋田県大仙市立清水小学校  
校長 照井 美久

### 1 はじめに

本校は、秋田県内陸南部の横手盆地の北側に位置し、東に雄大な奥羽山脈を望む田園地帯にある、全校児童 80 名余りの小規模校である。本地区は、地名「清水」という名のごとく、清らかな水が湧き出でる地域でもある。そのため、秋田県の雄物川水系を中心に湧水を起源とする池沼とそれに連なる水路に棲む淡水魚「イバラトミヨ」が地区内の複数箇所に生息している。この地域に生息する「イバラトミヨ」は「雄物型」と呼ばれ、環境省レッドリストにおいて絶滅危惧 1 A に指定されており、学術的にきわめて貴重であるとともに、絶滅のおそれが最も危惧されている魚種である。そのため、生息する池等も限られており、地域を挙げて保全活動に取り組んでいる。

本校でも数年来、地域の皆さんとともに、保全活動に取り組んできた。総合的な学習の時間に、4～6年生が学校に近い生息池で、池の清掃等の保全活動を行う他、定期的に地区内 12 の生息池の水質調査を委員会活動として行っている。その活動が評価され、日本水環境学会より「平成 25 年度東北水すまし賞」を授与された。

本校では、絶滅危惧種の保全活動を行いながら、生物多様性について考え、学習を進めてきたところであるが、「絶滅危惧種」というつながりで、一般社団法人あきた地球環境会議から「地球の仲間とつながろう 森の人『オランウータン』と一緒に生きる喜びを！」という ESD 環境教育プログラムの実証校の要請を受けることになった。その実証の様子が、環境省 ESD 環境教育プログラムガイドブック③に掲載されている。ガイドブックに掲載されたプログラムは平成 26 年度の実践であるが、今年度もブラッシュアップされたプログラムを行う予定である。

本稿では、本プログラムを SDGs 17 の目標の視点でも捉えていく。平成 26 年当時、SDGs は発表されていなかったが、本プログラムと SDGs の親和性は非常に高いと考える。したがって、本プログラムを今年度実施するに当たり、SDGs を踏まえた実践となるよう改善を加え、ゴールを明らかにして実践したいと考える。SDGs の中で本プログラムをどのように展開すればいいのかを検討し、SDGs の視点での位置付けをはっきりさせて取り組みたい。本年度の本プログラムは、9 月現在まだ実施していないが、本プログラムを含む今年度の本校での SDGs への取組については、最後に概要を紹介する。

以下に紹介する実践には、関連する SDGs 17 の目標のロゴを明示することとする。



【イバラトミヨ雄物型(秋田県水産振興センター)】



【保全活動を掲載した新聞記事と昨年の活動の様子】

## 2 ESD環境教育プログラムの実証

「地球の仲間とつながろう～森の人『オランウータン』と一緒に生きる喜びを～」



### (1) ESDの主な視点（東北地区ESD環境教育プログラム集より）



持続可能な社会づくりの構成概念について

構成概念	学 習 内 容
相互性	ゲームを通し、生態系は様々な生き物がお互いに関わりあって成り立っていることを学び、生命を尊重する態度を養う。
有限性	生き物と人間のつながりを学び、限りある資源を共有しているという自覚を促す。
責任性	これまでの生活を見直し、実践することで個々の役割と責務を自覚し、進んで参加する姿勢を身につける。



ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度について

能力・態度	学 習 内 容
多面	背景や知識を学び、その学習を自分が実際に感じる体験をすることで広い視野で総合的に考える力を身につけることができる。
伝達	成果を周りと共有する事で、相手に解りやすく伝える力を身につけ、学校の取り組みを地域活動に繋げることができる。
協力	ゲームやWSを通し、相手の立場になって考える力やみんなで協力し他者を尊重する心を育てることができる。

### (2) ねらい

- ① 人間の日常の暮らしは、あらゆる生き物と共存していることに気付き、その生き物の立場になって考えることで「命の大切さ」を学ぶ。
- ② 世界中で人間が引き起こしている環境破壊により、多くの生き物が絶滅の危機に瀕していることを題材に、その要因や各問題を多面的に理解する。
- ③ 世界に目を向け、人間と生き物が共に平和に暮らすためには、何が問題か、何が大切かを整理し見直すことで、今後の環境に配慮した持続可能な社会の在り方を考え、問題を解決しようとする人材の育成を目指す。
- ④ 参加児童が、プログラムの成果を家族や地域と共有することで、持続可能な地域社会の形成や継続的な環境保全に向けた一歩を踏み出す。

(3) プログラムの流れ (総時間 8 時間)

① ゲームを通じて、動物の気持ちになってみよう (シンパシーワークショップ) (2 時間)



人間と動物に扮し、神経衰弱のルールを利用したエサ取りゲームを通して人間の理不尽さについて体感する。

【POINT】

- ア 参加児童が地域で保護活動をしていることを共有する。
- イ 相手(動物)の気持ちになって考え、動物/人間役が立場によって感じ方が異なることに気付き、それぞれどんな気持ちになったかを共有する。
- ウ 汚染された環境や森林伐採について知り、ゲームは現実には起こっていることに気付く。
- エ ゲーム内に登場するブラックカードとは何かを考える。



【シンパシーワークショップの様子】

◎ 生物多様性と絶滅危惧種について学び、これから人間のすべきこと、自分が頑張りたいことを考え共有した。

② 世界でおこっている現実～絶滅危惧種オランウータンが教えてくれること～ (2 時間)



マレーシアのオランウータンが森林伐採により生息地を失い、絶滅危惧種となった経緯 (なぜ、どのように、何のために) を知り、考える。

【POINT】



- ア マレーシアの気候風土やオランウータンの暮らし、現在の個体数を知る。
- イ オランウータンの森を伐採して作ったプランテーションから収穫されたパーム油は身近にあることを知る。
- ウ マレーシア留学生から、ボルネオ島の環境問題についての発表を聞く。
- エ 人間と生き物の関係について考えたことを共有する。



【秋田大学マレーシア留学生 3 名と一緒に授業を受ける】

◎ 人間が熱帯雨林をプランテーション開発したこと等で、オランウータンは住処を失い、100 年前の 8 % しか生息していないという現実を知り、自分たちにできることを共有した。

③ パーム油を通して社会のルールを考えてみよう（2時間）



世界のパーム油について生産量等の現状と人間生活での必要性について学び、自分たちのできることを考え、話し合う。

【POINT】



ア 世界や日本のパーム油市場について理解し、遠い熱帯雨林と私たちの結びつきが強いことを学ぶ。



イ WWF が中心となり「持続可能なパーム油のための円卓会議（RSPO）」が設立されたこと、絶滅危惧種の保護と社会ルールの両立について学ぶ。



ウ 持続可能な社会のしくみの構築についてのワークを通し、自分のできることを見付け、成果を発表し共有する。



【秋田の店頭に並ぶ商品にパーム油が使用されていることを手に取り確認】



【マレーシア留学生から社会のルールについての考えを聞く】



【WWF の活動】

- （世界 100 か国以上  
5,000 人のスタッフ）
- ・オランウータンの保護活動
- ・パーム油産業を持続可能にする活動

◎ 人間はオランウータンを絶滅危惧種にしてしまったが、救うことができるのもまた人間である。熱帯雨林は日本から遠いところにあるが、私たちの生活との結びつきはとても強い。これらを理解し、持続可能な地球の姿や、社会のしくみを築くことを学んだ。

④ 地球の仲間たちの声を聞こう！（2時間）



体験講座を通じて世界や地域の絶滅危惧種について知り、学んだことを基に将来の地球の姿や目指す社会を学ぶ。

【POINT】

ア 大森山動物園（秋田市）にて生物多様性や絶滅危惧種について学ぶ。

イ 特に地域に生息する絶滅危惧種について、指定された理由や解決方法等について具体的に学び、何をすべきかを考える。



【小松園長と飼育員さんからイヌワシの生態などの貴重な話を聞く（生きているイヌワシ）】

◎ 世界や地域の絶滅危惧種について学び、私たちができることとして、まずは「知ること」の大切さを知る。

(4) 振り返り（児童の感想）

- ・人間が動物たちのすみかや食べ物をうばい、減少へと追い込んでいることを知りました。
- ・自然を大切にしていかななくてはならないことを学びました。
- ・生き物が平等に暮らせたらいいと思いました。
- ・人間によって絶滅危惧種になった生き物を、私たちが救う事も出来ると学びました。
- ・意識しながら責任をもって行動していきたいです。
- ・環境をこわすことが出来るのも、それを良くすることが出来るのも人間だということを知りました。
- ・環境に関わる仕事につきたいと思いました。
- ・私は「不知不愛」という言葉が心に残りました。知らない物には、なにも感じず、愛せないということは、私たちと動物や環境にも言えることだと思います。
- ・今まではイバラトミヨだけだったけど、4回の勉強でオランウータンや、イヌワシも守るためにはどうしたらいいのか考えることができました。
- ・私が心にのこった言葉は、「人間がかわらなければ、地球の未来や今の環境は変わらない」です。
- ・水の汚染を防ぐことや、木を切つてむだにしないことなど、自分たちでできることを考えて、環境を守っていきたいです。

(5) 成果として

- ・子どもたちの世界観の広がり
- ・職業観・人生観の変化
- ・心に強く響く言葉との出会い
- ・これからの生き方を深く考える機会
- ・グローバルな視点で物事を考えていくという姿勢の形成



◇自分たちが行っている「イバラトミヨ保全活動」への価値付け



◇自分たちの活動に対して「自信と誇り」「責任」「次への意欲」



◇「地域を愛する気持ち」がより強くなる

### 3 本年度の取組概要

今年度、5年生が総合的な学習の時間にSDGsに取り組んでいる。最初の時間、右のシートを用いて、世界で起きている問題を認識するところからスタートした。学習を進める中で、秋田県生活環境部温暖化防止課が行った「海のゴミ、元はどこゴミ」事業に参加して、SDGs目標14及び17について体験を通して学んだ。この事業は、GPS発信機を搭載した模倣ゴミ（GPSフロート）を製作し、河川に放流して動向を追跡調査し、流下・漂着状況を把握するとともに、海岸に漂着しているゴミの発生抑制について普及啓発することを目的に行われた。本校の近くの玉川岸から模倣ゴミを放流し、インターネットでGPS追跡することで、海のプラスチックゴミの多くが生活由来のものであり、現在問題となっているマイクロプラスチックは、元は私たちが出したものであることを知ることができた。

5年 総合的な学習の時間

◎今、世界の国々がかかえている問題ってどんなこと？

-----

-----

-----

↓

これらの問題を解決するための目標が「SDGs（エスディーゼズ）」

◎SDGsとは・・・




-----

-----

-----



【放流イベントの様子とGPSによる追跡画面】

イベントで学んだことは、学校で4年生に向けて発表し、その後4年生と一緒に啓発用看板をデザインした。それが振り返りとなっている。また、これまでSDGsについて学習したことを、9月の学習発表会で保護者や地域住民に向けて発信した。SDGsの学習は今も継続し深まっている。



【学んだことを発表】



【意見を出し合い看板を考案】



【学習発表会で発表】

### 4 終わりに

本校では、身近な地域を通して世界を見る目を育む環境教育を行ってきた。少し先の未来が予測不可能である昨今、今と未来を生き抜くため「持続可能な社会の創り手」が求められている。私たちの責務は、未来の大人、すなわち現在の子どもたちを「持続可能な社会の担い手」に育てることであると考える。これからも「Think globally, act locally」をテーマに環境教育を実践していきたい。

※参考 <https://edu.env.go.jp/esd/news/702>

<http://www.cееakita.org/news/newsinfo/3007/>

## これからの総合的な学習の時間のあり方を求めて

### ～地域とつながる探究的な学習づくりの実践～

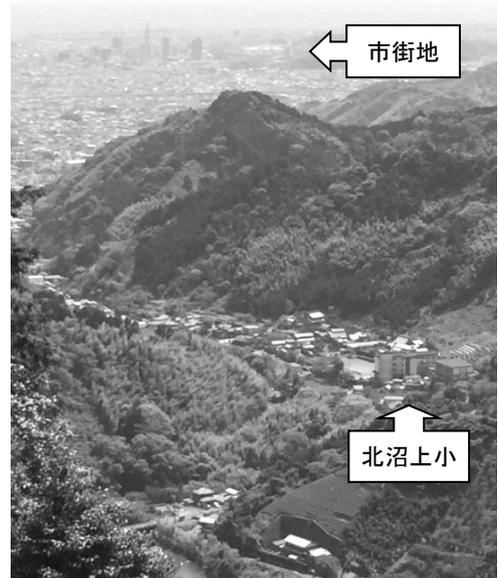
静岡県静岡市立北沼上小学校

校長 見城 秀明

#### 1 主題設定の経緯

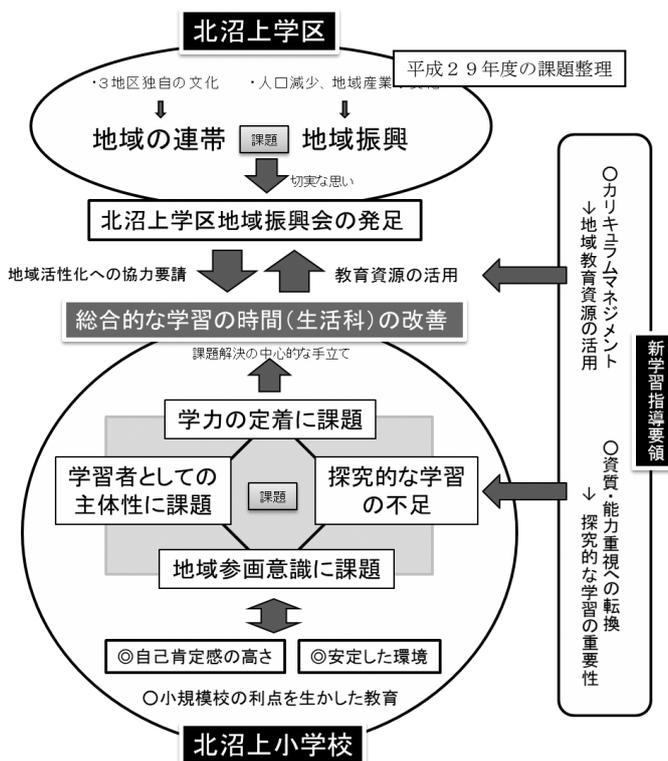
##### (1) 地域の状況（取組の背景）

本校は、静岡市の市街地から30分ほどの山間地に位置する、全校児童41名の小規模校である。本校の学区は、もともと中心部を流れる長尾川を挟んだ2つの地域が合併して誕生した経緯があるため、地域同士の交流が少なく、人口減少や地域産業の衰退といった問題を前に、学区全体の連帯と振興が課題となっていた。そのような折、平成28年度末に学区全体をまとめる「北沼上学区地域振興会」が住民によって立ち上げられ、小学校に対しても地域の振興に力を貸してほしいと熱い要望が寄せられるようになった。



##### (2) 本校の課題

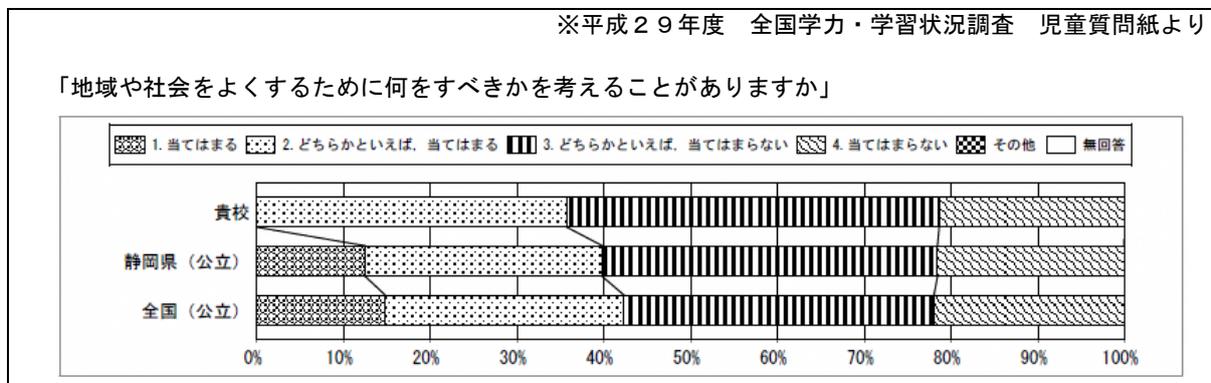
平成29年度当初、本校児童には学力の定着に課題がみられた。子どもたちは、決められた学習には真面目に取り組むが、必要以上にはやろうとしない。そういった「学習に対する主体性の不足」が、学力の定着に影響しているのではないかと考えられた。また、平成28年度までの6年生の総合的な学習の年間指導計画を見ると、地域性の薄い「交通安全調査」や「修学旅行の事前調査」といった、決められた活動が先にある内容が中心で、探究的な学習としては弱い面があった。「学習に対する主体性の不足」にはこのような探究的な学習の不足が大きな要因になっていることも考えられた。



学習には真面目に取り組むが、必要以上にはやろうとしない。そういった「学習に対する主体性の不足」が、学力の定着に影響しているのではないかと考えられた。また、平成28年度までの6年生の総合的な学習の年間指導計画を見ると、地域性の薄い「交通安全調査」や「修学旅行の事前調査」といった、決められた活動が先にある内容が中心で、探究的な学習としては弱い面があった。「学習に対する主体性の不足」にはこのような探究的な学習の不足が大きな要因になっていることも考えられた。

実際、4月に実施された全国学力・学習状況調査の結果をその後詳しく分析すると、「自分で課題を立てて情報を集め、整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という問いに「当て

はまる」という回答した児童は、全国平均に対して13ポイント下回る15%弱で、探究的な学習が不十分である状況が裏付けられた。また、総合的な学習の地域性が薄いことは、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という問いに「当てはまる」という回答が「ゼロ」という結果にも表れていた。



このような状況から、本校は教育課題改善の中心に総合的な学習の時間を置き、その内容を地域の人・もの・ことといった教育資源を最大限活用したものに見直すこととした。平成29年度は、まず6年の総合的な学習を大幅に見直し、実践しながら全職員で研修を重ね、平成30年度からは、生活科を含め全学年で授業改善に取り組むこととした。

## 2 ねらい

地域からの要望に応えつつ、地域と学校を互いに活かし合える北沼上学区ならではの探究的な学習を作り上げることで、児童が主体的に学習に取り組み、学力の定着（＝新学習指導要領で求められる資質・能力の育成）につなげる。

## 3 実践

### (1) 地域の課題に目を向ける

#### ～放置竹林の問題～

総合的な学習が本格的にリスタートして、始めに6年生の子どもたちが地域の主な課題として挙げたのは、次の3点だった。

- ① 他地域の人からの認知度が低い
- ② 住む人が減っている
- ③ 昔はお茶やみかんが盛んだったが、今は竹林が多くなっている

特に③については、実際に問題意識をもって学区を歩いてみると、課題として実感することができた。放棄された小屋や耕作地があちこちに点在するのが目に入り、放置竹林も非常に目立つ。

本校ではここ数年、5年生が学区に住む環境問題の専門家に指導を依頼し、フィールドワークなどを交え、「放置竹林」の自然環境に及ぼす影響などについて教えていただい



ている。そのため、6年生の子どもたちは自分たちの学区にも環境問題が存在することを強く認識するようになっていた。

## (2) 課題解決のヒント

### ～竹粉肥料づくり体験～

子どもたちは、5年生の時、放置竹林の問題を解決するヒントとして、フィールドワークと共に竹粉肥料づくりを体験した。これは、伐採した竹を有効活用する方法の一つで、竹を粉状に粉碎したものを一般家庭の生ゴミと混ぜることで、土壌改良のための肥料に生まれ変わらせるというものである。竹粉を加えられた生ゴミは、毎日混ぜることで次第に無臭になり、ほとんど形が確認できなくなるまでに分解される。実際、体験初日の生ゴミの臭いに悶絶していた子どもたちは、日に日に形と臭いを無くしていく様子に驚きを隠せなかった。この肥料づくりにより、竹が利活用できる他、家庭の生ゴミの排出量も減らすことができることを、子どもたちは学ぶことができた。



## (3) 課題解決へのチャレンジ

### ～きたぬま特産品開発プロジェクト～

6年生になった子どもたちが、(1)で挙げた課題に対して考えた解決策のひとつが、地域の特産品をつくるというアイデアだった。その具体的な形がトマトジャムである。

- ① 竹粉肥料を利用してミニトマトを栽培する
- ② そのミニトマトを使って、トマトジャムとして商品化する
- ③ 特産品としてトマトジャムをアピールすることで、北沼上を広く知ってもらう

ミニトマトは、低学年の時に生活科で栽培した経験があるため、子どもたちにとっては身近な作物である。また、短期間で生育し、収穫時期も他の活動と都合がつくため、改革1年目はこのプロジェクトを進めることとした。

### 【きたぬま特産品開発プロジェクト① ～ミニトマトの栽培】

5月、地域の専門家に指導を仰ぎながら、さっそくミニトマトの栽培にとりかかった。竹粉肥料を施した学校の畑に、ミニトマトの苗を植え、水やりや脇芽摘みなどの世話の仕方を学んだ。以後、自分たちのプロジェクトの成功を左右する重要なアイテムであるミニトマトを、子どもたちが責任持って世話をする姿が目立つようになった。





【きたぬま特産品開発プロジェクト② ～ミニトマトの収穫】

竹粉肥料の効果により、通常よりも大粒な実がたわわに実ったミニトマトを、子どもたちは7月以降毎日のように収穫した。子どもたちは、その重みと共にプロジェクトの手ごたえを感じ始めていたようである。夏休み期間中も収穫は続き、収穫した実は、冷凍して加工までの間保存した。



【きたぬま特産品開発プロジェクト③ ～トマトジャムの製造】

収穫と平行して、ジャムのレシピづくりを担当する子どもたちが、収穫したミニトマトを使ってジャムの試作を行った（写真1）。何人もの人に試食してもらい、砂糖とレモン汁の配合で味を整えながら商品として納得のいくレシピを作成。10月には、協力を依頼してあった地域の食品加工所「平山の里」に収穫したトマトをもちこんで、ジャムを製造していただいた（写真2・3）。

子どもたちは、それぞれの過程で地域の方々に関わり、その都度プロジェクトの目的を繰り返し説明することで、活動しながら目的意識も高めていった。



写真1



写真2



写真3

【きたぬま特産品開発プロジェクト④ ～トマトジャム販売へ】

6年生のプロジェクトチームは、自分たちの課題である、北沼上の認知度を上げることにしても準備を進めた。まず、トマトジャムを使ってアピールするために、商品名について話し合いを重ね、「きたぬまの自然のおいしさ・トマトジャム」という商品名に決定。さらに、そのコンセプトが伝わりやすいように、商品ラベルのデザインも試作を交えて話し合い、北沼上学区の全景写真をバックに、地域のキャラクターを配したデザインに決定した。

170個用意されたトマトジャムは、11月に行われる地元農協主催の農業祭と、北沼上学区地域振興会主催のイベントの2回にわたり販売することになった。特に後者は地域振興に直接貢献できる場として、地域からの期待も大きかったが、事前に新聞報道が入った影響もあり、どちらも大盛況となり、トマトジャムは予想以上の短時間で完売となった。

イベントの中では、ジャムの販売と同時に、北沼上学区に関するアンケートを行い、様々な立場の方に自分たちの地域がどのようなイメージで捉えられているか、また自分たちのプロジェクトに対する意見等を収集した。この資料は、その後の授業で子どもたちが整理し、プロジェクトの振り返りを行う際の手がかりとした。そして、プロジェクトの総括を、1月に実施した「えとまつり学習発表会」にて、地域の方々に発表した。

(4) 学校全体の取組へ 平成30年度計画策定

平成29年度末、6年生の実践によって得られた成果・課題をもとに、全ての学年の生活科及び総合的な学習の時間の年間指導計画を見直した。1, 2年生の生活科では、「なかよしだいさくせん」や「わたしのお気に入り」などの単元を通して地域の人・もの・ことと自分とのつながりを学び、3, 4年生ではそれを更に教科横断的な視点で体験的に学習しながら、地域のよさを学ぶ。そして、5, 6年生では、地域の課題に目を向け、子どもたちなりの視点で地域振興に関わり、これから自分はどういう地域と関わっていくのかを考えるようにした。

### トマトジャムで地域発信

北沼上小6年生が栽培・企画

静岡市東区市北沼上の6年生が、育て上げたトマトジャムを同区J静岡市西谷会館1日館で開催された農業祭で売り出し準備を進めている。各家庭、駒本千尋

販売するのは、「きたぬまの自然のおいしさ・トマトジャム」だ。トマトジャムは、北沼上学区のトマトを原料として、砂糖、果汁、香料を加えて作った。6年生が育て上げたトマトは、収穫後すぐに加工された。ジャムは、11月19日の農業祭で販売される。販売場所は、静岡市東区市北沼上の同校。販売時間は、午前10時から午後5時。販売価格は、1個100円（税別）で、4個400円（税別）のセットもある。販売の収益は、地域の振興に充てられる。また、ジャムの販売を通して、地域の人々への発信も目指している。

19日の農業祭で販売

完成したラベルを瓶に貼り付け、袋詰めする北沼上小6年生



平成30年度 静岡市立北沼上小学校 総合的な学習の時間全体計画			
学校教育目標 心豊かでたくましい子			
重点目標 自分の思いや考えをもってやりぬ子			
総合的な学習の時間の目標			
探究的な見方・考え方を働かせ、北沼上学区の人、もの、ことに関わる総合的な学習を通して、自ら見出した課題に対して自分の思いや考えをもちながら粘り強く解決まで取り組む楽しさを味わい、北沼上学区に住む自らの生き方を考えることができる。			
『わたしたちのふるさと『きたぬま』で、つながる・まなぶ・そだつ』			
育成を目指す資質・能力 ○～重点			
【知識及び技能】 ○北沼上学区のよさや特徴がわかり、住む人の様々な思い・願いを知る。			
【思考力、判断力、表現力等】 ○思考ツールを使って情報を整理・分析したり、メディアを活用して自分の考えを表現したりする。			
【学びに向かう力、人間性等】 ○自分の思いや考えをもって、課題の解決に向けた探究に取り組むことができる。			
めざす子どもの家(3・4年生)		めざす子どもの家(5・6年生)	
○北沼上学区の人・もの・ことについて、そのよさを知る。		○北沼上学区についての特徴がわかり、住む人の様々な思い・願いを知る。	
○北沼上学区についての情報を集め、そのよさを多面的に考える。		○自分たちで北沼上学区に関する課題を見出し、課題解決の方法を考え、実践する。	
○北沼上学区に対する自分の思いや考えをもつ。		○自分の思いや考えをもって、課題解決に取り組む。北沼上学区について考えをよぶとする。	
学習内容			
3年生	4年生	5年生	6年生
お宝発見！ いいとこきたぬま		『きたぬま』をもっと元気に！ 有名に！	
地域の要人、名人 ・歴史(徳徳神社 等) ・文化(長尾川の花火等) ・施設(電気園 等)		北沼上学区地域振興会 ・J静岡市 ・沼上環境管理プラザ	
○『きたぬまお宝探検隊』のお宝探し ・自分たちのふるさとを調べよう ・『わたしのお気に入り』について調べよう ・お宝のよさを伝えよう		○『きたぬまお宝探検隊』のお宝探し ・北沼上学区を元気にして、多くの人によさを伝えてもらう ・『きたぬまお宝探検隊』のお宝探し ・北沼上をアピールする方法を考えよう ・北沼上の人・物のよさを伝えて、特産品を販売しよう ・特産品の販売しよう	
○『きたぬまお宝大感謝祭』 ・きたぬまのお宝に感謝して、自分たちのふるさとを伝えよう ・『きたぬまお宝大感謝祭』のお宝探し		○『きたぬまお宝大感謝祭』 ・『きたぬまお宝大感謝祭』について、様々な立場の人と意見交換しよう	
社会(働く人たちの役割)	社会(安全安心(ふしとちうづ))	社会(国土の自然とくに生きている)	国語(ハロウィンをしよう)
国語(わたしたちの未来を)	国語(新聞を作る)	理科(生き物の成長、実験)	社会(自分について考えよう)
国語(本を読んで調べよう)	国語(読んで、書いて、書いてみよう)	国語(読んで、書いて、書いてみよう)	社会(身近な人と関わり)
理科(自然のふしを伝えよう)		国語(読んで、書いて、書いてみよう)	道徳(学級生活・社会の役割と責任)
【授業】授業の終了で、わかったこと、思ったこと、思ったことを配列し、次回に取り組みごとについて見直しをもつ。 【教師】児童の活動を認め、励ます。 児童の記述した内容を確認し、進捗状況を把握するとともに、アドバイスをして児童の意欲を高める。 (ワークシート、発表、活動内容 等)			

#### (5) 平成30年度の取組

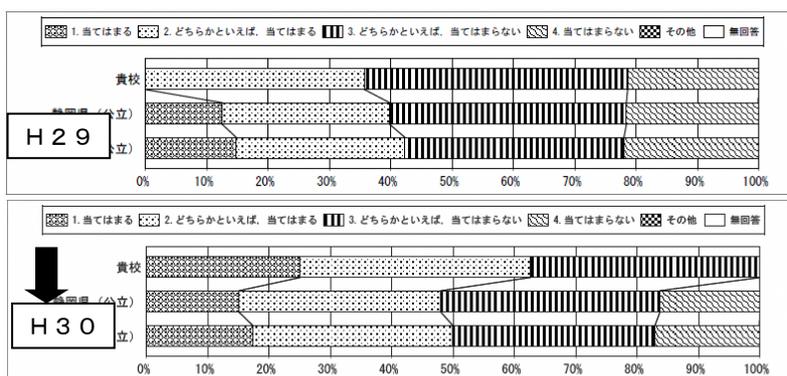
今年度、5, 6年生は「きたぬま元気プロジェクト」と題し、学習を進めている。特に本年度は子どもたちの課題発見のプロセスを重視し、視点を新たに調査活動したり、地域の方々と「きたぬまサミット」と称して課題を話し合ったりすることで、地域の課題を自分たちの課題として捉えることができるように配慮している。また、昨年度から継続して取り組むことになったトマトジャムの製造・販売については、今年度からは学校での栽培に加え、地域の7軒のお宅にミニトマト栽培を依頼した。学校の中だけで活動が展開されるのではなく、地域の特産品として地域に取り組みを広めていく働きかけを、今後も継続していく予定である。



#### 4 取組を振り返って

子どもたちが本気になる時、それは子どもたちにとって切実な課題がある時である。身近な地域の問題は、自分との関わりが深いだけに切実な課題となりやすい。そして、地域の問題を取り上げる時、環境問題はどうしても避けて通れない問題である。今回、一般的には「自然豊

図A 「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」



か」と言われている北沼上学区が、学習によって実は農業の衰退や放置竹林などで大きな問題を抱えていることに気づくことで、子どもたちはまさに切実な課題と直面した。このような課題に対し、自分たちなりに解決へのアプローチを具体的に考え、実行する体験は、自身の生き方を見つめ直す上でも非常に大きな意味をもつと考える。図Aは、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」との問いに対する回答である。少人数の学校であるため、あくまで参考の域にとどまるが、平成30年度には多少の意識の向上が見られる。今後、地域の教育資源を活用した探究的な学習により、こういった意識がますます高まり、それと共に子どもたちの「学習者としての主体性」が根付き、それが非認知能力を含めた学力の定着につながっていくことを期待したい。そのために、本校では平成30年度より民間の学力調査を取り入れ、よりきめ細やかに子どもの学力を分析していくことにしている。

世界自然遺産の小笠原にある小学校

# 小笠原村立 小笠原小学校

小笠原村を背負っていく人材育成の実践

～ 私たちの世界自然遺産小笠原諸島父島～



World Natural Heritage Ogasawara Islands

世界自然遺産 小笠原諸島



小笠原諸島国定公園50周年



# 小笠原村を背負っていく人材育成の実践

## ～私たちの世界自然遺産小笠原諸島父島～

小笠原村立小笠原小学校  
校 長 西澤 盛和  
主 幹 教 諭 清水 智

### 1 はじめに

小笠原小学校は、1968年（昭和43年）の小笠原諸島の日本復帰に伴い、それまで米軍関係が使用していたラドフォード提督学校の校地、校舎を引き継ぎ、東京都小笠原村立小笠原小学校および中学校として開校した。開校当時、職員8名、児童32名、生徒21名であった。

平成30年（2018年）、日本への復帰（返還）50周年を迎えた。その7年前、平成23年6月、小笠原諸島の豊かで独特な自然の価値が認められ、「小笠原諸島」が世界自然遺産として登録された。

「世界自然遺産小笠原諸島父島」。このフレーズは、小笠原小学校の卒業式の際に、卒業生が述べる言葉の冒頭に出てくる。6年間の学びを終えた卒業生たちの思いがこの言葉に凝縮されており、自分たちの言葉として堂々と口に出せる姿が小笠原小学校の卒業生とも言える。ここでは、世界自然遺産の中で学ぶ小笠原小学校の様子についてお伝えする。

### 2 めざす児童像

父島の子供たちは小中高まではほぼ全員が同じ進路を歩み、高校卒業後は内地に進学・就職している。子供たちは小笠原に対する愛着があり、将来島で働きたいという意欲があるが、戻ってきたくても島での就職先がほとんどないという課題がある。

そのために、郷土に対する誇りや愛着をもつ心情や態度を育成するとともに、小笠原での生活基盤を開拓できるリーダーとして、地域を「より良くしていこう」という未来像を予測して、計画・実行できる力を身に付けさせたい。

### 3 具体的な取組

#### ①授業改善について

外部講師を招聘し、「持続可能な社会づくり」を推進するために必要な知識や資質・能力について研修会を開催することで、教員が共通の視点を持ち、主体的・対話的で深い学びができる授業づくりができるようにする。

□平成29年度

・小玉 敏也 教授(麻布大学生命・環境科学部)

□平成30年度

・小玉 敏也 教授(麻布大学生命・環境科学部)

・増田 直広 様

(公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 主席研究員)

地域で活躍し、地域を育てる人材の育成に向けて、学校全体で共通認識の下に授業改善ができるように、ESDの視点に立った生活科・総合的な学習の時間を中心とした指導計画の見直し・改訂を行う。



#### ②教科等横断的な視点による組織的な取組

各教科等の特性に応じた「見方・考え方」を持ち、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりするなど、教科の枠を超えた視点を意識した授業を行い、系統的な指導を年間計画に反映できるようにする。

#### 4 外部人材や地域資源等の活用

##### (1) 人材リストバンクの作成

各学年の総合的な学習の時間や生活科、理科・社会などにおける、専門講師に指導・助言などをいただく。

##### (2) 講師・団体の合同ミーティング

小笠原小学校に関わる、講師・団体の方々と小笠原小学校の総合的な学習の時間についての方向性を確認する機会をもつ。

##### (3) 地域資源等の活用

これまで指導していただいている島内諸団体、環境省、小笠原世界自然遺産センター、小笠原村環境課、小笠原支庁土木課、小笠原海上保安署などとの連携の強化を図る。



#### 5 平成30年度 ESD に関わる各学年の主な実践

##### 《1年生》

生活科	「生き物大好き～My マイマイを作ろう～」 「私のあさがお」「遊びに行こうよ(春夏秋冬)」
-----	--

##### 《2年生》

生活科	「私たちの野菜畑」「生き物と友達」「作って遊ぼう」 「清瀬川の生き物」
-----	--

##### 《3年生》

総合的な学習の時間	「南洋踊り」「小笠原の生き物」
-----------	-----------------

##### 《4年生》

総合的な学習の時間	「小笠原の植物」「小笠原の太鼓」
-----------	------------------

##### 《5年生》

総合的な学習の時間	「小港キャンプ」「アオウミガメの学習」
-----------	---------------------

##### 《6年生》

総合的な学習の時間	「アホウドリの学習」「タコの葉細工」 「母島移動教室」「世界遺産」
-----------	--------------------------------------

##### 《ヤシの木学級》

生活単元学習	「生き物を育てよう～グッピー～」 「校外歩行」
--------	----------------------------



## 6 具体的な実践例 《平成29年度第4学年総合的な学習の時間「小笠原の植物博士になろう」より》

### (1) どのような知識や能力を身に付けさせるのか

まず「進んで参加する態度」を育成することを重点においた。自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度の育成である。小笠原小学校は都内でも稀にみる、固有種の植物が身近にある学校である。徒歩圏内に数多くの固有植物が点在している。この凄さや素晴らしさ、そして、これからも植物を大事にする行動力の育成に重点を置いた。

また、それに伴って、素晴らしさや大切さを表現する「アウトプットする力」は、4年生の学力調査での課題でもあった「国語」で学んだ力をもとにして強化していくことにした。

### 1. どのような知識や能力を身に付けさせるのか

◎ 進んで参加する態度

○ 地域を知る・経験する

【設定理由】

小笠原の植物を大事にする、  
行動力の育成。  
アウトプット・発信力の強化。

貴重な植物が身近にあるからこそ



国立教育政策研究所教育課程研究センター「Eの学習指導要領を構築し展開するための必要な枠組み」より

### (2) どのような教育課程の編成・実施・評価・改善を行うのか

今回の実践では、学習を大きく分けて2回行った。1周目は体験活動重視で、これまでの自然体験活動を想起させた上で、小笠原の植物との出会いに重点に置いた。ここでのゴールは、ステッカー作りとした。2周目は学習の流れ自体を重視し、何とかしなきゃという思いを基に島内外への啓発活動を行った。1周目をベースに2周目の学習サイクルが成り立つ流れである。

### 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善

◎ 学習サイクルを2周

○ 思考ツールの活用

【1周目】  
体験活動重視。ステッカー作り。

【2周目】  
体験や思いをもとに、自分たちで  
できることの具現化。(啓発活動)

何とかしなきゃ！から始まる2周目



### 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善(1周目)

体験活動重視。  
ロゴマーク作り。



### 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善(1周目)



○専門業者(自動車用のステッカー製造会社)に発注し、製作。  
○家庭配布。→自家用車、水筒、ノートなど様々な用途で使用されている。

学習の1周目は体験活動重視。地域の観光ガイドであり、本校 PTA 会長でもある吉井様にご指導を頂いた。小笠原が世界自然遺産に登録された際に作成されたロゴマークに込められた小笠原の動植物の意味などを教えて頂き、体験活動の動機付けとした。学習の1周目はこのロゴマークを「自分たちで作る」という活動を1周目のゴールに設定した。この1周目に関してはトップダウン的な指導である。

### 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善(2周目)

◎ 進んで参加する態度

○ 地域を知る・経験する

村内の主要箇所(バス、公共施設等)に、**啓発ポスター**  
**や図鑑**を設置。

学習サイクルの2周目

何とかしなきゃ！



### 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善(2周目)

学習過程重視。  
啓発活動。



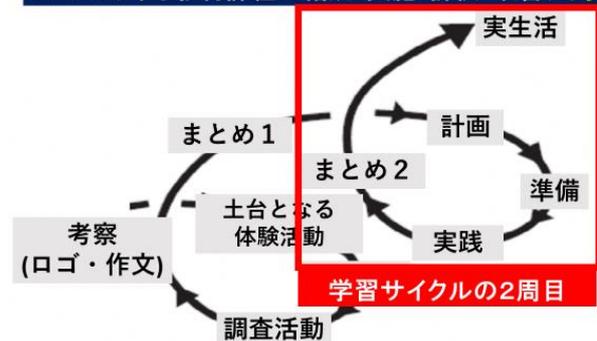
学習の2周目では、自分たちの生活の中に、固有植物がたくさんあることがいかに凄いことであることかを再認識させ、小笠原の植物の素晴らしさを伝えることやその植物が失われてしまいそうな現実を知ること、何とかしなきゃという思いを保全・保護活動を行っていく必要があるという、内発的な動機付けにつなげた。

内発的な動機付けに支えられて学習がスタートしているので、継続的、そして質の高い学習時間となった。学習サイクル2周目からはボトムアップな状態であった。サイクル2周目に関しては、学習の流れを重視した。まず、思考ツールを使い「情報整理」「情報共有」を行い、自分たちの活動の方向性を定めた。そして、国語科で身に付けた力、文章作成やインタビュー時における言葉遣い、アンケート調査などを駆使し、5種類のポスターと2種類の図鑑を作成し、島内各所に設置させていただいた。

この実践で重要視したのは、この学習サイクルであった。特に、1周目の土台となる体験が非常に重要であると考えており、小笠原小学校の核となる部分とも言える。

2周目の実生活につなげる部分は時数の調整や実践内容ではまだまだ乗り越える問題が山積しており、次年度に向けての課題であると考えている。

## 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善(2周目)



今回は学習の終盤で、小笠原支庁土木課から声をかけていただき、島内の公共事業に参加させて頂くことが実現した。

小学校単体では実現することがかなり厳しい「小笠原の土地に小笠の固有種を植栽する」「子供たちが大きくなるまで保全活動を計画・実施する」という、これまでに類を見ない未来につながるプロジェクトとなった。

## 2. どのような教育課程の編成・実施・評価・改善(2周目)



今回の植樹から初めて使用された小笠原固有種「タコの葉」のチップ(他の雑草の成長を防いだり保湿の役目を果たす)は、通常使用される他木材のチップに比べ、腐りにくいことが判明した。平成30年9月現在、東京都が製品化に向けて研究を始めることになる・・・

### (3) 外部の力をどのように活用するのか

今回の実践のように、学習の1周目では地域の観光ガイド、学習の2周目では東京都支庁を始めとして島内諸団体との連携事業を行った。これを実現するためには、指導計画の詳細な打ち合わせ、ゴールイメージの共有が必要であった。学校側のゴールがどのようなものなのか、サポートして下さる外部のみなさんの理解がより深まることで、継続的なwin-winな関係が築けると考えられる。

## 3. 外部の力をどのように活用するのか

◎ 人材ネットワークの拡大

○ 指導計画の共有

限られた時数の中で、専門性をもった講師にどのような指導・支援をしていただくのか。

指導計画の共有

Win-Winの関係

月	日	活動内容	場所
1月	17日	小笠原小学校・小笠原支庁(土木課・都レンジャー)・小笠原グリーン・三徳建設・小笠原観光ガイド(マルベリー)・NPO法人(野生生物研究会)による植樹体験	村内都道
2月	1日	小笠原小学校・小笠原支庁(土木課)による植樹体験	小笠原小学校
3月	1日	小笠原小学校・小笠原支庁(土木課)による植樹体験	小笠原小学校

#### (4)活動の成果と課題

活動の成果	活動での課題
1. 地域との <b>関係性</b> 構築	1. <b>評価</b> 内容の改善
2. <b>学習過程</b> の再構築	2. 指導計画( <b>外部の力の活用</b> )の改善
3. 地域植物への <b>見方・考え方</b> の変容	3. <b>実践資金</b> ・指導者( <b>人材</b> )の確保



<b>成果</b>	①これまでの「4年植物単元」における地域との連携が深まった。植物単元は、他の動物や楽器、踊り等に比べるとマイナーではあったが、専門性が高い地域や外部との連携が深まったことで、子供たちの意欲の高まり、学習の質の高さが見られた。
	②学習プランを外部と情報共有し、ゴール設定を明確化した。これまでの指導計画を見直し、改善を図れたことで、活動の拡がりももてた。
	③学習活動を通して、小笠原の植物への興味関心が高まった。「雪がもし小笠原で降ったら、固有種が大変」という話題が出るほど、子供たちの頭の中に「小笠原の植物」のイメージが広がっていった。
<b>課題</b>	①評価方法・内容の改善。指導と評価を連動して授業が行えるよう、改善が必要である。数少ない研修の機会を活用して、授業力向上に全教職員で取り組んでいく。
	②指導計画の改善。植物単元で作った学習計画をもとに、小笠原小学校スタイルを確立し、外部の力を効果的に活用する指導計画が全学年・全単元で必要と考える。今後は生活科や理科・社会科といった世界自然遺産と関わりの深い教科・領域との連携が視野に入れていくことで、主体的・対話的で深い学びができる授業づくりができるようにする。
	③実践資金・指導者の確保。小笠原小学校は単学級であり、異動がおおよそ3年ごとに行われる現状がある。地域人材を育成する良い実践に関しては、継続活動できるよう実践資金の確保や指導者の確保・引継ぎが必要と考える。

#### <協力>

小笠原支庁土木課、東京都レンジャー、小笠原グリーン株式会社、三徳建設株式会社、小笠原観光、マルベリー(観光ガイド)、NPO 法人野生生物研究会 (順不同)

#### 7 さいごに

本校にとって生活科や総合的な学習の時間で学ぶ「世界自然遺産小笠原諸島父島」とは、郷土小笠原への誇りと愛着を育むことそのものである。その郷土は世界自然遺産であり、日本に返還されてから50年の節目を迎えた小笠原村、そして、豊かな自然の持続可能性を担う児童の育成には、大きな期待とともに思い責任がある。

## 未来につながる、世界に広がる志をもった生徒の育成

静岡県磐田市立豊田中学校  
校長 倉島 茂見

### 1 はじめに

本校は、静岡県西部、天竜川の東側、その沖積平野に位置し、水田や茶畑が広がる自然豊かな土地である。近年、東名高速道路のスマートインターチェンジや大型商業施設が開設され、工業施設も進出しているが、住民の出入りは少ない。教育熱心な土地柄で、地域住民の学校に対する期待は大きく、学校の諸活動にも大変協力的で、青少年健全育成運動等地域の諸活動も活発である。

本校は、昨年度創立70周年を迎え、平成33年度には小中一体校へと移行することが決まっており、ここ数年は歴史的に見ても大きな転換期を迎えていると言える。

平成27年度より学校教育目標を「志をもち、たくましく生き抜く生徒の育成」と改め、キャリア教育を基盤とした学校経営を推進してきた。平成29年度には、国立教育政策研究所教育課程研究指定(E S D)を受け、E S Dの視点を取り入れたキャリア教育を展開し、キャリア教育優秀校文部科学大臣表彰を受けた。同時に、エネルギー教育モデル校、オリンピック・パラリンピック教育実施校の指定を受け、加えてコミュニティ・スクールとして地域とともにある学校を目指し、諸機関・地域・保護者等から様々な支援を受け、「志」をキーワードとした充実した教育研究・実践を積み重ねている。

### 2 教育構想

現在の教育構想は、2ページに掲載したグランドデザインが示すとおり、学校教育目標を「志をもち、たくましく生き抜く生徒の育成」とし、E S Dの視点を取り入れたキャリア教育を推進している。E S Dを「持続可能な社会の担い手を育む教育」と押さえ、「社会の担い手」を育むことはまさしくキャリア教育である。キャリア教育において重視される勤労観・職業観に、「どんな社会を目指すのか」といった視点を加味することで、将来の社会像・未来像、つまり目指すべき「持続可能な社会」をも考えることができる生徒を育成することができると考えている。

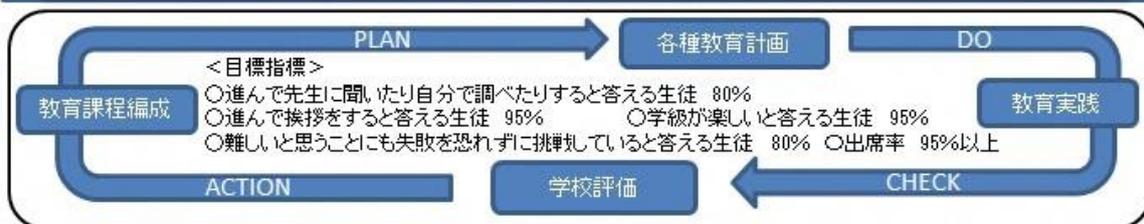
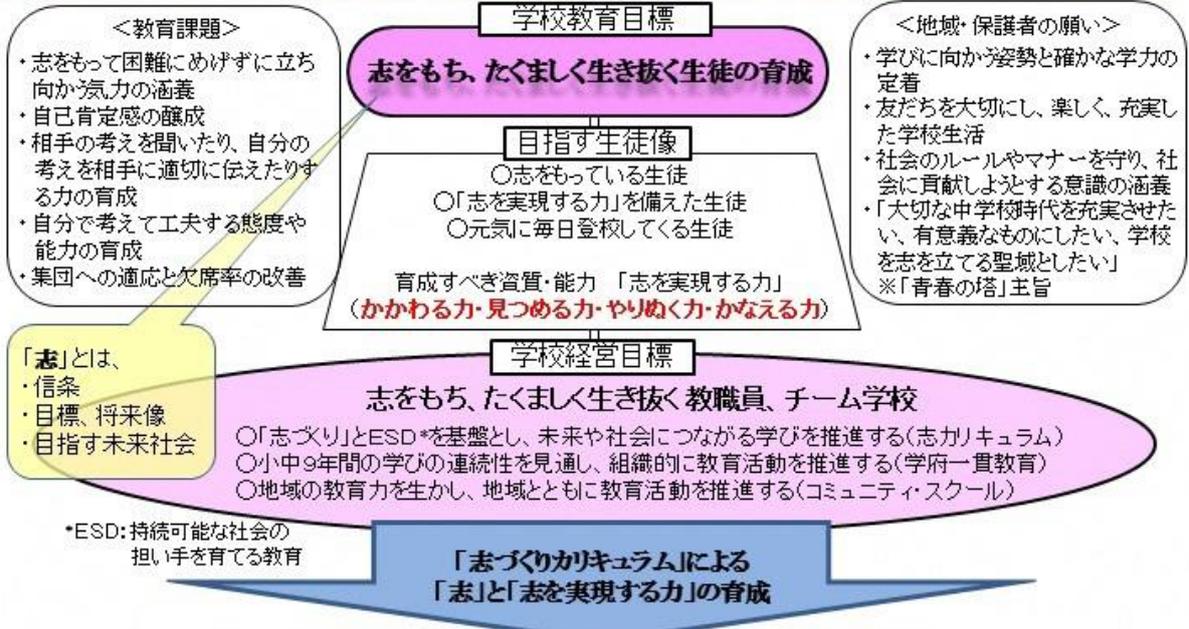
すべての教育活動において育みたい資質・能力として、「かかわる力・みつめる力・やりぬく力・なかえる力」の4つを押さえた。これは、キャリア教育における「人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリア・ランニング能力」をわかりやすく言い換えたものである。E S Dで重視する能力・態度と表現は異なるが、共通する点が多く、通じるものがあると考えている。

本校教育のキーワードは「志」であり、生徒のほぼ全員が学校教育目標、またはキーワードを言うことができる。本校が考える「志」は、「信条」「目標・将来像」「目指す未来社会像」の三つである。三つめの「目指す未来社会像」は、E S Dの視点により加えたもので、持続可能な社会が、自分の生き方や目標・将来像の延長線上にあるという解釈である。

目指す社会像の一つの姿としてSDG s(持続可能な開発目標)が挙げられるが、環境に関する学習は、このような教育構想のもとで実践をしてきた取り組みの一つである。

# 平成30年度 豊田中学校グランドデザイン

国立教育政策研究所教育課程部(ESD)指定校  
 愛知ESDモデル校(ESD)指定校  
 ボランティア・パブリック・サービス・ラーニング推進校



### 3 環境教育の実践

環境教育の実践を、本校の教育構想の「授業づくり・志づくり・仲間づくり」の視点からまとめた。

#### (1) 授業づくり

授業づくりでは、「未来や社会につながる授業づくり」を目指している。それぞれの教科の学習が未来や社会にどうつながっているのかを教師がしっかり押さえた上で、それを考えさせたり、気付かせたりできるような授業の実践を推進している。そのため、年度当初、教科ガイダンスを実施し、教科を学ぶ意義について考えさせるとともに、それをわかりやすいキャッチフレーズに表し、学習と未来や社会とのつながりを意識するようにしている。つまり、教科における志を育む教育、それはまさにESDであり、理科や社会科の授業実践は環境教育に直結するものと考えている。単元についても同様に、単元ガイダンスを行い、そこで学ぶ内容等の価値を考えさせたり、気付かせたりする工夫をしている。

#### 教科キャッチフレーズ

国語	「言葉は、人と時をつなぐ架け橋だ」
社会	「時空間に広がる志」
数学	「宇宙の言語をひも解こう」
理科	「科学の扉を開いて未来につなげよう」
英語	「世界で発揮しよう あなたの志」
音楽	「人と人、響き合う」
美術	「創造的アイデアで世の中を変える 作品を通して時空を越えてつながり合う」
保健体育	「仲間と共に、どんな時代でもたくましく生き抜く土台をつくる」
技術・家庭	「無用なものから有用なものを」(技術) 「家庭生活に行かせる知恵を」(家庭)

#### ア 3年理科「水素エネルギー」

(株)リバネスの協力のもと、(株)ホンダ技術研究所の技術者を招き、燃料電池のしくみや燃料電池車について学んだ。

講師の先生から、水素の性質や燃料電池のしくみについて説明を受けた後、実験用燃料電池車を実際に走行させた。その後、外に移動し、本物の燃料電池自動車を見学したり試乗したりした。自動車のバッテリーから体育館にコードをつなぎ、体育館内の照明を点灯する実験も行い、環境にやさしいと同時に、災害時にも役立つことを実感することができた。



## イ 2年美術科「エコオープン粘土で鉢づくり」

オープンで焼成できるオープンエコ陶土を使って陶芸の小作品を制作した。菊練りやひも作りで自分の考えた形の器・鉢が完成することを体感した。また、材料であるエコ粘土は、使わなくなった後、ゴミとして捨てるのではなく粉々にして土に入れれば、微生物が分解し土に還ることも学習した。できあがった作品に種を蒔き、夏休みに家で栽培させた。



ちなみに、生徒が使用して余ったエコ陶土を集めておき、教科担任が各教室用のミニ鉢を制作した。余った陶土を無駄なく活用した。廊下に置くことで、生徒が廊下を走ったり、壁に寄りかかったりせず、落ち着いた環境づくりにもなった。

## ウ SDG sを取り入れた授業

毎年、校長が全校集会において「SDG s」について話している。それを受け、各学級においてもそれに関連した授業を行っている。

1年社会科「開発の進展と環境問題」では、SDG s 17項目のうち4項目を選択肢として、生徒が「持続可能な開発」の視点から最も重要な項目を選び、選んだ理由について意見交換した。

道徳においても、グループでSDG sの17項目を大切に思う順に並べ、その理由を意見交換する学習を行った。

各教科においては、学習内容がSDG sの17項目に関連しているとき、黒板にそのロゴマークを張り、それを意識した授業を展開している。



## エ 課外「エコツアー」

生徒・教員希望者によるエネルギー・環境関連施設の見学・体験を行った。

愛知県豊田市の「とよたエコフルタウン」を訪問し、水素自動車やエコハウス等を見学・体験した。地球温暖化のしくみや現状、様々な環境にやさしい取組や素材などを知ることができた。同じく豊田市の「トヨタの森」では、インタープリターの方に案内していただき、森林の中で生きている動植物を観察したり、触れたりしながら、いのちのつながりを実感することができた。

参加した生徒は、エコツアーを新聞にまとめ、他の生徒にも学んだことを伝えた。



## (2) 志づくり

「志づくり」は、本校の総合的な学習の時間「志タイム」を中心とした活動である。地域の人

材を活用することで、自分の生き方を考えたり、未来や社会とのつながりを考えたりすることができるようになることが目的である。学年ごと、キーワード「志」のもと、「志を知る」「志をもつ」「志を実現する」をテーマに下記のような活動を展開している。

1年「志を知る」・・・地域交流活動、「ようこそ先輩」、地域探訪、先輩授業
2年「志をもつ」・・・未来授業、職業体験学習、先輩授業、立志の式
3年「志を実現する」・・・地域貢献活動、上級学校入学体験、先輩授業

その中でも、3年の地域貢献活動は、今までお世話になった地域や地域の方々に対し、自分たちにできることを考え提案し、話し合いながら実行していく活動である。昨年度の3年生は、以下のような活動を考え、行った。

美化活動（公会堂清掃）	夏祭りボランティア（服のチカラプロジェクト）
美化活動（防災倉庫）	服のチカラプロジェクト（チラシづくり、回収）
美化活動（神社草取り・ゴミ拾い）	おめでとう会
美化活動（小学校）	どんぐり音楽祭（掃除）
美化活動（公園）	長藤学校
美化活動（カーブミラー、交通標識）	サマジャン大会
ふれあい活動（お年寄りと）	納涼祭（会場準備、出店手伝い）
あいさつ運動（スーパー前）	ポスターづくり（美化活動、服のチカラプロジェクト）
防災倉庫備品点検	フェスタ加茂（準備、片付け）
盆踊り大会（来賓接待、高齢者等誘導）	ハッピーフェスタ（ゲーム進行）
盆踊り大会（模擬店手伝い、子供の誘導）	交流会（子供と折り紙、お絵かき）
盆踊り大会（お茶・ジュース、サービス券配布）	子供の世話（子育てサロンにて）
流しそうめん（準備～片付け）	
読み聞かせ	

この中にある「”届けよう、服のチカラ”プロジェクト」は、生徒会が中心となって取り組んでいる活動だが、この地域貢献活動の一環として、生徒自ら地域の方に提案し、理解を得て、地域行事の中で展開した。事前に地域に配布するチラシを手作りし、呼びかけ、当日地域の方から届けられる古着を回収した。（詳細後述）

その他にも、美化活動等、環境保護や保全にかかわる活動に取り組んだグループもあった。

### (3) 仲間づくり

校外内の行事を通し、学級や学校への所属意識を高め、共に同じ意識を持って行動することのよさやすばらしさを体験させることを目的とした活動である。主に、各学級や生徒会が主体性をもって様々な活動を展開している。

#### ア ”届けよう、服のチカラ”プロジェクト

ユニクロの社会貢献活動「”届けよう、服のチカラ”プロジェクト」（海外の難民に古着を届ける活動）に協力し、生徒会として全校生徒で取り組んだ。3年生は、家庭・地域からの回収活動も展開し、5000着もの衣類を回収することができた。困っ



ている人を助ける国際的な社会貢献活動であると同時に、服のリサイクルでもあり、環境保全に貢献でき、一人一人の力は小さくても、それが海外にまで届いたり、地球環境の保全に役立ったりすることの喜びを実感することができた。

#### イ 福島ひまわり里親プロジェクト

「福島ひまわり里親プロジェクト」とは、特定非営利活動法人(NPO) チームふくしまが、2011年5月から展開している東日本大震災復興支援活動である。障がい者作業所で封入されたひまわりの種子を購入し、「里親」として育て再び福島へ送り返す。送り返された種子は、再び障がい者の施設でリパックされたり、植えられたりして、ひまわりが福島をはじめ多くの地で花を咲かせる。明るい黄色い花は「復興のシンボル」として、友好の証となり、震災の教訓を心に刻むこととなる。また、バスのバイオエネルギーとしても活用されており、雇用にも教育にも環境保護にもつながっている活動である。

このプロジェクトに、生徒会の美庭プロデューサー(生徒会の花壇等の世話をする組織)が参加することを決め、すぐに種を購入し、募金の形で生徒や家庭にひまわりの種を配布した。募金額は決めず、募金者の意志に任せたとこ、5粒に1,000円の募金をする生徒もいた。さらに、美庭プロデューサーのメンバーで学校花壇やプランターに種を蒔き、育てた。他にも、クラスで取り組んだところもあり、学校にあちこちでひまわりが育つこととなった。学校のまわりの生徒の家でもひまわりが育ち、9月に種を回収したところ、**〇〇kg**もの種が回収でき、それを福島に送った。

人の役に立つことや、環境にやさしい活動に参加することの喜びを味わうことができた。また、人と人とのつながり、絆の大切さを改めて感じる事ができた。



## 4 成果と課題

学校教育目標、グランドデザインに示されている「志」を「持続可能な社会の担い手」としての意志・意識ととらえ、その実現のためのアプローチの一つとしての環境教育を位置付けることで、全教科・総合的な学習の時間等において、全職員で取り組むことができた。SDGsの示すとおり、アプローチは様々であったが、全職員で取り組むことができたことは、学校づくりにおいて大きな成果である。生徒、教員ともに、環境、持続可能な社会、エネルギー等に対する意識を高めることができた。中でも、「自分なりの志をもっている」や「人の役に立ったり、人に喜んでもらえたりすることは嬉しい」の問いに肯定的評価をする生徒は9割を上回っており、未来を担っていこうという意志や社会に役立つ人になりたいといった意識が芽生えていることがうかがえる。

しかし、地球温暖化等、環境教育の中核となる部分が系統立っておらず、カリキュラムを整えていく必要がある。今後も、一つ一つの着実な環境教育の実践とともに、全職員体制を維持しつつ、ESDの中での環境教育の位置づけを明確にし、カリキュラム開発に取り組んでいきたい。





# 研究会沿革史

全国小中学校環境教育研究会  
東京都小中学校環境教育研究会

- 昭和39. 9. 10 東京都小中学校公害対策研究会が錦華小学校にて発足  
初代会長に 小野 孝雄 就任  
11. 13 会報「碧い空」創刊号を発行  
12. 11 講演会「公害と児童生徒の健康について」を開催（都PTAと共催）
- 昭和40. 1. 20 会長・副会長で四日市・尼崎方面の公害状況を観察
- 昭和40. 10. 5 公害講演会を開催（都PTAと共催）、空気清浄器を都内50校へ配布  
12. 1 都内児童生徒の公害に関する作文・詩募集
- 昭和41. 10. 1 全国主要都市の中学1年生を対象に公害意識調査実施
- 昭和42. 1. 20 都内小学校・中学校を対象に教育環境調査を実施、2月に結果を発表  
2. 13 全国小中学校公害対策研究会を発足（東京都港区立桜田小学校）  
東京・大阪・四日市・北九州・神奈川・千葉・釜石

- 
- 昭和42. 6. 1 第二代会長 伊藤 和 就任  
11. 1 東京都学校公害対策連絡協議会に協力
- 昭和43. 11. 7 第1回 学校公害研究大会を開催（代々木ゼミナール）
- 昭和44. 4. 10 都の学校に及ぼす公害対策研究会へ協力  
10. 10 第2回 学校公害研究大会を開催（東京都港区立桜田小学校）
- 昭和45. 2. 6 第3回 学校公害研究大会を開催（勤労福祉会館）  
2. 10 単行本「碧い空を子どもらに」を発行

- 
- 昭和45. 4. 1 第三代会長 中島 定吉 就任  
4. 15 東京都公害副読本・スライド製作委員会を出し、その製作に協力
- 昭和46. 1. 10 第2回 全国調査実施「東京都及び七大都市の教育環境意識調査」  
中学1年・小学校5年生、都内4万名、七大都市8万名  
全国小中学校養護教諭対象「公害に関する意識と実態調査」35,000校  
1. 28 第4回「親と教師の公害研究大会」開催（勤労福祉会館）
- 昭和46. 10. 14 第5回 学校公害教育研究大会開催（東京都江戸川区立平井南小学校）  
11. 10 公害講座開講（朝日新聞社講堂）
- 昭和47. 6. 1 都内の児童生徒対象「公害意識と実態調査」実施
- 昭和48. 2. 20 第6回公害研究大会（東京都品川区立鈴ヶ森中学校）

- 
- 昭和48. 4. 1 第四代会長 立石 書信 就任（中央公害審議会委員兼務）  
6. 5 都内の児童生徒の公害意識実態調査「教育環境調査」実施
- 昭和49. 5. 15 環境週間記念、都内の児童生徒の公害に関するポスター、作品募集  
7. 20 都内の児童生徒の夏季20日間健康調査実施
- 昭和50. 2. 10 第7回環境教育研究全国大会開催（日本青年館）
- 昭和50. 5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集  
12. 5 第8回環境教育研究会全国大会開催（東京都台東区立下谷小学校）
- 昭和51. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和51. 4. 20 東京都教育委員会副読本及びスライド編集に協力  
5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集  
9. 7 東京湾人工渚見学会を実施
- 昭和52. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣  
2. 21 第9回環境教育研究会全国大会開催（東京文化会館）
- 昭和52. 5. 10 東京都環境週間行事に協九一都内児童生徒の図画・作文募集  
6. 10 東京都内児童・生徒20,000人に環境意識調査実施  
9. 19 「これからの環境教育はどうあるべきか」研究会開催  
（日本環境協会と共催）  
12. 6 江東清掃工場・東京湾埋立地見学会
- 昭和53. 1. 12 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和53. 5. 10 東京都環境週間行事に協力  
10. 31 人工渚・廃棄物埋立地等の東京湾及び宇宙博見学
- 昭和54. 1月～7月 環境週間東京都実行委員会に参加協力  
4月～6月 同上の行事の図画・作文募集に協力  
6. 5 環境教育講演会（東商ホール）  
7. 17 公害副読本代表者会議  
9. 3 日本環境協会の映画企画の協力  
11. 30 都水道施設見学（利根川水口）
- 昭和55. 2. 13 常任理事会（朝霞浄水）  
2. 19 環境教育の講演と映画会（労音会館）  
2. 21 第11回 全国環境教育研究大会（東京文化会館）
- 昭和55. 8. 21 第12回 全国環境教育研究大会（滋賀県大津市）  
11. 20 人工渚・廃棄物埋立地等東京湾見学会

- 
- 昭和56. 4. 1 第五代会長 谷本 寛 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
4月～6月 東京都環境週間行事に協力  
6. 29 環境庁長官室にて本研究会役員と鯨岡長官、環境教育について懇談  
11. 20 隅田川・東京湾見学会 (隅田川クラブ後援)
- 昭和57. 1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力  
2. 5 第13回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和57. 4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力  
10. 29 全体研究会 (於東京都教育会館 講師 愛知教育大学教授 榊原康男先生)  
11. 18 環境教育授業協議会 (東京都杉並区立方南小学校)
- 昭和58. 1. 25 同 上 (東京都江戸川区立上小岩小学校)  
2. 18 第14回 全国環境教育研究大会 (東京・関東百貨店健保会館)  
会報「碧い空」20号発刊  
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
- 

- 昭和58. 4. 1 第六代会長 藤田 繁雄 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力  
11. 4 全体研究会 (東京都台東区立下谷小学校)  
講師 文部省初等中教育局 教科調査官 奥井智久先生  
11. 10 自本科学協会等主催、リモートセンシング研修会に協力
- 昭和59. 1. 20 第15回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)  
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
- 

- 昭和59. 4. 1 第七代会長 平野 輝和 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
6. 9 第五代会長 谷本 寛 第2回朝日森林文化賞を受賞  
11. 29 環境教育研究授業及び協議会 (東京都渋谷区神宮前小学校)
- 昭和60. 1. 24 第16回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京都江戸川区総合文化センター)  
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
- 

- 昭和60. 4. 1 第八代会長 遠藤 尚 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
6. 5 東京都台東区立下谷小学校にて総会
11. 18 千葉県船橋市立船橋小学校環境教育研究大会見学  
12. 5 東京都公害監視委員会と意見交換
- 昭和61. 1. 31 第17回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京文化会館)

昭和61. 6. 6 昭和61年度 定期総会（東京都練馬区立光和小学校）  
10. 31 現地研修会（東京都八王子市立由木西小学校）  
昭和62. 1. 23 第18回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）

---

昭和62. 4. 1 第九代会長 塩沢 勇 就任（中央公害審議会委員兼務）  
6. 4 東京都台東区立大正小学校にて総会  
11. 9 現地研修会（東京都文京区立昭和小学校）  
昭和63. 1. 29 第19回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）

---

昭和63. 4. 1 第十代会長 小尾 辰昌 就任（中央公害審議会委員兼務）  
1月～6月 環境週間都行事に参加協力  
6. 6 昭和63年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）  
9. 17 都内児童の環境意識調査を実施  
11. 6 環境教育研究大会第11回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）  
11. 22 環境教育研究会 見学会（厚木市・七沢自然教室）  
平成元. 1. 27 第20回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
1. 27 会報「碧い空」26号発刊

---

平成元. 4. 1 第十一代会長 松澤 秀俊 就任（中央公害審議会委員兼務）  
6. 6 平成元年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）  
9. 5 環境教育研究会 見学会（つくば市公害研究所）  
環境教育研究会第12回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）  
平成2. 1. 26 第21回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
1月～6月 環境週間都行事に参加協力  
1. 27 会報「碧い空」27号発刊

平成2. 6. 6 平成2年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）  
9. 10 松澤秀俊会長 環境教育推進指導資料作成委員  
9. 20 環境教育研究会 見学会（台風のため中止）  
11. 30 第15回 全国教育研究大会に参加（国立教育会館 江頭 基子会計）  
12. 6 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中央区立銀座中学校）  
平成3. 1. 25 第22回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
1. 25 会報「碧い空」28号発刊  
環境週間都行事の図画・作文募集審査への参加協力

---

平成3. 4. 1 第十二代会長 高木 恒治 就任（中央公害審議会委員兼務）  
5. 31 平成3年度 定期総会（江東区立東陽小学校）  
9. 19 環境教育研究会 見学会（神奈川環境センター）

11. 22 都小中学校環境教育研究発表会（江戸川区立松江小学校）  
平成4. 1. 31 第23回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
会報「碧い空」29号発刊  
東京都環境実行委員会への参加  
環境教育シンポジウムへの参加  
全国ネットワークの強化活動  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
- 

- 平成4. 5. 29 平成4年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会（東京都渋谷区立本町東小学校）  
第十三代会長 岩本 光雄 就任（中央公害審議会委員兼務）  
7. 29 平成4年度 全国小中学校環境教育研究会定期総会（ホテルマリナーズコート東京）  
7. 29～31 教育総合展参加協力（研究発表・展示・実演）  
12. 8 東京都小中学校環境教育研究発表会（北区立豊島中学校）  
平成5. 1. 11 事務局 江頭基子 文部省環境教育指導資料作成協力（平成6. 3. 31迄）  
1. 29 全国小中学校環境教育研究大会（中央区立教育センター）  
会報「碧い空」30号、研究紀要24号発刊  
3. 31 環境教育研究集録 第3集発刊  
東京都環境週間行事実行委員会への参加協力  
文部省環境教育シンポジウムへの参加  
都教委グループ研究助成費受給  
全国ネットワークの強化活動  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間行事運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成5. 5. 23 平成5年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会  
(東京都渋谷区立神宮前小学校)
- 平成6. 1. 18 第25回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都庁 第二庁舎・ホール）  
会報「碧い空」31号、研究紀要25号発刊  
全国小中学校環境教育研究会支部長会・総会（東京都庁 第二庁舎・ホール）  
2. 24 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都大田区立西六郷小学校）  
3. 31 環境教育研究集録 第4集発刊  
文部省環境教育シンポジウムへの参加、協力  
全国ネットワークづくりの活動強化（支部結成）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成6. 6. 21 平成6年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会  
(東京都渋谷区立神宮前小学校)
- 平成6. 11. 25 第30回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立南葛西第三小学校）  
平成7. 1. 20 第26回 全国小中学校環境教育研究大会  
全国支部長会（東京都江戸東京博物館ホール）

会報「碧い空」32号、研究紀要26号発刊  
文部省、第1回全国環境フェアへの参加協力（埼玉県）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

3. 31 環境教育研究集録 第5集発刊

---

平成7. 6. 9 平成7年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会  
全国小中学校環境教育研究会 定期総会  
全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）  
第十四代会長 江頭 基子 就任（中央公害審議会委員兼務）  
8. 7 環境教育研究会 一日研修（港区立芝小学校）  
12. 4 第31回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都北区立西浮間小学校）  
平成8. 1. 26 第27回 全国小中学校環境教育研究大会（福岡県福岡市、福岡市博物館）  
会報「碧い空」33号、研究紀要27号発刊  
文部省、第2回全国環境フェアへの参加協力（10. 30～11. 1福岡県）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）  
3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

平成8. 5. 30 平成8年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）  
4. 5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）  
12. 6 第32回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
第28回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都渋谷区立神宮前小学校）  
会報「碧い空」34号、研究紀要28号発刊  
文部省 第3回全国環境フェアへの参加協力（11. 14仙台市）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長・会長、副委員長：副会長）

平成9. 3. 31 環境教育研究集録 第7集発刊

平成9. 5. 23 平成9年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）  
第29回 全国小中学校環境教育研究大会（高知県民文化ホール）

平成9. 8. 28～29 東京都小中学校環境教育研究会研究部夏季宿泊研修  
(東京都杉並区立教職員研修所)

11. 18 第33回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区小松川第二小学校）  
会報「碧い空」35号、研究紀要29号発刊  
全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
文部省 第4回全国環境フェア参加（松江市）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

平成10. 3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

---

平成10. 5. 22 平成10年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）

第十五代会長 中庭 武雄 就任

8. 2～3 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）

平成11. 1. 22 第30回 全国小中学校環境教育研究大会

第34回 東京都小中学校環境教育研究発表会

（東京都杉並区立杉並第十小学校、セッション杉並）

会報「碧い空」36号、研究紀要30号発刊

第2回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力

東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：一代会長、副委員長：副会長）

3. 31 環境教育研究集録 第9集発刊

平成11. 5. 21 平成11年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都渋谷区立笹塚小学校）

8. 22～23 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）

9. 25～26 自然観察会実施（新潟県・当間観光リゾート）

12. 7 第35回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都渋谷区立笹塚小学校）

平成12. 1. 21 第31回 全国小中学校環境教育研究大会（岐阜大学教育学部附属心・中学校）

会報「碧い空」37号、研究紀要31号発刊

第3回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

文部省全国環境フェア参加（広島市）

環境パートナーシップ東京会議への参加

中央環境審議会企画政策部会と各種団体との意見交換会出席（経済社会のグリーン化）

3. 31 環境教育研究集録 第10集発刊

---

平成12. 6. 9 平成12年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）

平成12. 6. 9 第十六代会長 平部 武彦 就任

平成12. 8. 17～18 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区富士学園）

平成13. 1. 26 第32回 全国小中学校環境教育研究大会

第36回 東京都小中学校環境教育研究発表会

（東京都渋谷区立猿楽小学校・渋谷区立鉢山中学校）

会報「碧い空」38号、研究紀要32号発刊

第4回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

第2回 自然観察会（新潟県・十日町市）実施

東京都環境週間行事運営委員会に参加

第3回 文部省全国環境学習フェア（三重）参加

- 平成13. 3. 31 環境教育研究集録 第11集発刊
- 平成13. 6. 8 平成13年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）
8. 16～17 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 8～9 第3回 自然観察会実施（新潟県刈羽村、当間リゾート）
- 平成14. 1. 25 第33回 全国小中学校環境教育研究大会  
第37回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立大杉小学校）  
会報「碧い空」39号、研究紀要33号発刊  
第5回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第4回 文部科学省全国環境学習フェア（滋賀）参加  
環境パートナーシップ東京会議への出席  
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成14. 3. 31 環境教育研究集録 第12集発刊
- 
- 平成14. 6. 7 平成14年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）  
第十七代会長 佐々木 定治 就任
8. 15～16 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 8～9 第4回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）
11. 15 第38回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立二之江中学校）
- 平成15. 1. 24 第34回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉県成田市立吾妻小学校・吾妻中学校）  
会報「碧い空」40号、研究紀要34号発刊  
第6回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第5回 文部科学省全国環境学習フェア（金沢市）参加  
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成15. 3. 31 環境教育研究集録 第13集発刊
- 平成15. 6. 16 平成15年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）
8. 14～15 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 6～7 第5回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）
- 平成16. 1. 23 第35回 全国小中学校環境教育研究大会  
第39回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都新宿区立大久保小学校）  
会報「碧い空」41号、研究紀要35号発刊  
第7回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第6回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（群馬県片品村）  
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成16. 3. 31 環境教育研究集録 第14集発刊
- 平成16. 6. 14 平成16年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

- 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
8. 28～29 環境教育研修会（福島県Jビレッジ）
9. 4～5 環境教育研修会（新潟県当開高原）
- 平成17. 1. 20 全国理事会
1. 21 第36回 全国小中学校環境教育研究大会  
第40回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立東葛西小学校）  
会報「碧い空」42号、研究紀要36号発刊  
第8回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第7回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（愛媛県松山市）  
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成17. 3. 31 環境教育研究集録 第15集発刊

- 
- 平成17. 6. 14 平成17年度 全国理事会  
平成17年度 東京都小中学校環境教育研究会総会（東京都杉並区立泉南中学校）  
第十八代会長 高橋 康夫 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 3～4 環境教育研究会 自然観察会 新潟県 当開高原
12. 1 全国理事会
12. 2 第37回 全国小中学校環境教育研究大会（愛知県小坂井町立小坂井西小学校）
- 平成18. 2. 10 第41回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都調布市立布田小学校）  
会報「碧い空」43号、研究紀要37号発刊  
第9回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール  
第8回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（鳥取県）
- 平成18. 6. 6 平成18年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 11～12 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（杉並区立教職員研修所）
8. 25 第10回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
9. 2～3 自然観察会（新潟県塗当開高原）
11. 9 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
11. 10 第38回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都杉並区立泉南中学校）  
第42回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第44号 研究紀要第38号発行  
第9回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（つくば市）

- 
- 平成19. 6. 12 平成19年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）  
第十九代会長 岸 栄子 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）

- 、
- 8. 24 第11回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
  - 9. 1～2 自然観察会（新潟県当開高原）
  - 10. 11 全国理事会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
  - 10. 12 第39回 全国小中学校環境教育研究大会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
  - 平成20. 2. 15 第43回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）  
会報「碧い空」第45号 研究紀要第39号  
第10回文部科学省 全国環境学習フェア参加（岡山市）
- 

- 平成20. 6. 17 平成20年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（杉並区立泉南中学校）  
第二十代会長 綿貫 沢 就任
  - 8. 4～5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）
  - 8. 8. 22 第12回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
  - 9. 6～7 自然観察会（新潟県当開高原）
  - 12. 4 全国理事会（板橋区立金沢小学校）
  - 12. 5 第40回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都板橋区立金沢小学校）  
第44回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第46号 研究紀要第40号  
第11回文部科学省 全国環境学習フェア（福島市）
- 

- 平成21. 6. 15 平成21年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（杉並区立和泉小学校）  
第二十一代会長 末吉 潤一 就任
- 6. 27～28 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
- 8. 21 第13回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 9. 5～6 自然観察会（新潟県当開高原）
- 11. 26 全国理事会（広島県海田町立海田東小学校）
- 11. 27 第41回 全国小中学校環境教育研究大会（広島県海田町立海田東小学校）  
会報「碧い空」第47号 研究紀要第41号

- 平成22. 6. 28 平成22年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立杉並第四小学校）
- 6. 26～27 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
- 8. 20 第14回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 9. 4～5 自然観察会（新潟県当開高原）
- 12. 2 全国理事会（多摩市立南鶴牧小学校）
- 12. 3 第42回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）  
会報「碧い空」第48号 研究紀要第42号

- 平成23. 6. 16 平成23年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
8. 19 第15回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
11. 24 全国理事会（宮城県気仙沼市立大谷小学校）  
11. 25 第43回 全国小中学校環境教育研究大会  
（宮城県気仙沼市立大谷小学校・大谷中学校）  
会報「碧い空」第49号 研究紀要第43号
- 

- 平成24. 6. 26 平成24年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
第二十二代会長 棚橋 乾 就任  
8・20 第16回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
平成25. 1・2月 文部科学省・環境省  
平成24年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者に向けた研修（協力）  
2月 文部科学省 全国環境学習フェア（協力）  
2. 14 全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
2・15 第44回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
第48回 東京大会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
会報「碧い空」第50号 研究紀要第44号

- 平成25. 6. 18 平成25年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）  
6. 27 東京都小中学校環境教育研究会 研究員発足  
8. 22 第17回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
11. 28 全国理事会（秋田県大仙市大曲市民会館）  
11. 29 第45回 全国小中学校環境教育研究大会（秋田大会 秋田県大仏市）  
会報「碧い空」第51号 研究紀要第45号  
平成26. 1. 24 第49回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立連光寺小学校）  
1・2月 文部科学省・環境省  
平成25年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

- 平成26. 6. 17 平成26年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）  
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな〜あに見学）  
11. 20 全国理事会（神奈川県横浜市立永田台小学校）  
11. 21 第46回 全国小中学校環境教育研究大会（神奈川大会 横浜市立永田台小学校）  
会報「碧い空」第52号 研究紀要第46号  
12. 13 第18回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
平成27. 1. 30 第50回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都板橋区立板橋第二小学校）  
1・2月 文部科学省・環境省

平成26年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

---

- 平成27. 6. 16 平成27年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）  
第二十三代会長 国分 重隆 就任
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな〜に見学）
11. 19 全国理事会（東京都多摩市立多摩第一小学校）
11. 20 第47回 全国小中学校環境教育研究大会  
（東京大会 多摩市立多摩第一小学校）  
第51回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第53号 研究紀要第47号
12. 12 第19回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
12. 23 文部科学省・環境省  
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン フォローアップ研修（協力）
- 平成28. 1・2月 文部科学省・環境省  
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
- 

- 平成28. 6. 13 平成28年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）  
第二十四代会長 小山 成志 就任
7. 22 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、田町スマエネパーク見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
11. 17 全国理事会（須賀川市内ホテル）
11. 18 第48回 全国小中学校環境教育研究大会（福島大会 須賀川市立白方小学校）  
会報「碧い空」第54号 研究紀要第48号
12. 10 第20回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成29. 1・2月 文部科学省・環境省  
平成28年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
2. 10 第52回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都品川区立第三日野小学校）
- 

- 平成29. 6. 12 平成29年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）  
第二十五代会長 野澤 由美 就任
7. 28 エネルギー研修会（東京ガス根岸工場、田町スマエネパーク見学）
7. 31 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
- 7・8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
- 8・11月 文部科学省・環境省  
平成29年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
12. 7 全国理事会（掛川市内ホテル）

12. 8 第49回 全国小中学校環境教育研究大会（静岡大会 菊川市立菊川西中学校）  
会報「碧い空」第55号 研究紀要第49号
12. 9 第21回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成30. 2. 13 第53回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中野区立鷺宮小学校）
- 平成30. 6. 14 平成30年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
7. 27 エネルギー研修会（東京ガス新宿地域冷暖房センター見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（TKP新宿カンファレンスセンター）  
8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
10. 27～28 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2018（協力）
11. 29 全国理事会（府中市内）
11. 30 第50回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会 府中市立武蔵台小学校）  
第54回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第56号 研究紀要第50号
12. 8 第22回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 12・1月 環境省 平成30年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
- 平成31. 2. 23 平成30年度 水産多面的機能発揮対策シンポジウム（協力）  
（全国漁業協同組合連合会、全国内水面漁業協同組合連合会）
-

## 大 会 宣 言

環境教育は、人類を含めた地球上の生物全体にかかわる課題である。近年の地球温暖化等の環境問題は、自然の生態系に変化を与えるほど深刻な事態となっている。個人や社会全体がこれらの課題解決に早急に取り組むことで、持続可能な社会づくりを図らなくてはならない。環境教育はこの課題解決を図るための重要な学びであり、この地球上に生物が生存・繁栄を続けるために必要な教育である。

ここに、第50回全国小中学校環境教育研究大会、第54回東京都小中学校環境教育研究発表会を開催し、次世代を担う児童・生徒の環境にかかわる教育の在り方を追求するとともに、本大会に結集された総意をもって次の決意を表明し、その実現を期す。

- 一 環境教育は、地球的視野に立ち、地域に根ざした活動を通して生涯にわたる学びとして推進する。
- 一 環境教育は、自然を愛護すると共に、環境保全意識や環境倫理観、豊かな人間性を育む。
- 一 環境教育は、環境に対する正しい知識や、課題解決に取り組む能力を育成し、持続可能な社会づくりのための人材を育成する。
- 一 環境教育の小中学校での指導は、各教科や総合的な学習の時間、特別活動などすべての学びを通して実践し、指導を充実させる。

以上、宣言する。

平成30年11月30日

第50回全国小中学校環境教育研究大会

第54回東京都小中学校環境教育研究発表会

21世紀「環境の世紀」への提言

## 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

—環境教育で育む学力と環境保全意欲—

平成30年度

第50回 全国小中学校環境教育研究大会

東京大会

第54回 東京都小中学校環境教育研究発表会

研究紀要

平成30年11月30日 発行

発行 全国小中学校環境教育研究会  
会長 野澤由美

編集 研究部長 關口寿也

事務局 東京都府中市立南白糸台小学校

副校長 箱崎高之

東京都府中市白糸台6-48

TEL 042-365-5381

印刷所 (株)東京巧版社

TEL 03-3881-4173

この研究紀要は再生紙を使用しています

